

清代蘇州都市文化繁栄の実写 —『姑蘇繁華図』—

范 金 民
(岩井 茂樹 訳)

【解題】

文部科学省「21世紀COEプログラム」の研究拠点「都市文化創造のための人文科学的研究」(大阪市立大学文学研究科)の中に設けられた三つの研究教育チームのうち、「A:比較都市文化史研究」チームは、大阪を中心とする日本の都市と中国の都市との比較を進める研究活動の一環として、江南の都市化の現象を長年にわたって考察してこられた范金民氏を招聘した。范氏は江蘇省無錫の人(生年は1955年)で、南京大学卒業後、大学院を経て、同大学の講師として任用されたのち、1998年、副教授から教授に昇進し、現在は博士生導師として学生、院生を指導されている。氏の専門分野は中国明清時代の歴史であり、とりわけ江南地方(長江下流デルタ地帯)を対象として多くの研究業績を上げてこられた。とくに江南の商業化・都市化の現象に関する研究は特筆すべきものである。本誌第1号に掲載された「范金民氏の研究の紹介—中国明清時代の都市化の構造を中心として—」において、その研究の概要をご紹介したので、参照していただきたい。

范金民氏は本学滞在期間中(2003年3月15日-31日)に3回の研究報告を実施されたが、そのうち第2回の報告では、清代の蘇州城内外を描いた徐揚「姑蘇繁華図」を取り上げられた。本論文はこの時の報告原稿を翻訳したものである。氏は「姑蘇繁華図」に描かれる商店、庭園、各種の習俗、文化活動などを綿密に考証して分析を加えておられ、その作業自体がこれまでにない極めて貴重な成果である。清代における城郭都市の空間構造、商業・文化活動、政治的な位置づけを考察するうえで必ず参照すべき研究の一つであるといえよう。

なお、本論文の翻訳については、京都大学人文科学研究所の岩井茂樹氏の協力を得ることができた。この場を借りて、謝意を表しておきたい。

(井上徹記)

徐揚の『姑蘇繁華図』は、商店の宣伝文句を多く写し採っており、看板を読みとれるものの260軒を数える。清朝盛期、この中国でもっとも名高い繁栄した工商業都市の景観を、あらゆる角度から直観的に示しており、かつこれらの宣伝文句が反映している内容は、すべて文献上に相応の記載がある。『姑蘇繁華図』は当時の蘇州の殷賑をきわめた市場を示すだけでなく、蘇州の文化を反映する科挙教育、演劇音楽、婚礼習俗、庭園藝術などの豊かな内容をあますところなく示している。絵巻物中のおおくの場面は、文献から再現することが不可能であるか、あるいは文献の欠如を補うものであり、18世紀中葉の中国の経済と文化の中心であった蘇州の都市風景と人類の貴重な文化遺産を全面的に示している。

『姑蘇繁華図』、蘇州、城市文化、商店、文化遺産

清代前半期、蘇州は中国で経済と文化がもっとも発展した都市だった。康熙時代の人沈寓はつぎのようにいう。「東南の財賦、姑蘇（蘇州）もっとも重、東南の水利、姑蘇もっとも要、東南の人士、姑蘇もっとも盛」と。また、蘇州は「山海産する所の珍奇、外国通ずる所の貨貝、四方より往来し、千万里の商賈、肩を駢べて輶転す」とも¹⁾。同じ時代の劉獻廷は、蘇州は世に名高い天下の「四聚」のひとつであると述べた²⁾。「四聚」のうち、商業の繁華では蘇州が第一だというのが清代の人びとの一致した見方であった³⁾。康熙年間、「吳の閨門から楓橋鎮まで、二十里ほども店舗がつらなる」といわれ⁴⁾、乾隆年間には、蘇州の人たちは「四方万里、海外異域の珍奇怪偉、世に希にして得難きの宝、畢く集まらざるはなく、誠に宇宙間の一大都会なり」と誇った⁵⁾。乾隆27年、つまり徐揚の『姑蘇繁華図』が世に出た三年のうち、ある外地の人は、「蘇州は東南の一大都會にして、商賈輶転し百貨駢闊す。上は帝京より、遠くは交広に連なり、もって海外諸洋におよぶまで、梯航畢く至る」と贊嘆した。嘉慶年間、ある人は、「繁にして華ならざるは漢川の口（漢口）、華にして繁ならざるは廣陵（揚州）。人間の都會最も繁華なるは、京師を除けばこれ吳下にあり」⁷⁾

といった。獵微居士はさらに直截的に、「士の賢に事え仁を友とする者は必ず蘇においてし、商賈の賤きに羅いいれ貴きに販する者は必ず蘇においてし、百工雜技の流、その奇を售り異を鬻ぐものは必ず蘇においてす」と贊嘆した⁸⁾。同じ頃、蘇州を訪れた孟氏は蘇州の商工業の繁栄は、「一日として然らざるは無く、一時として然らざる無し。晴もまた然り、雨もまた然り」という⁹⁾。これら筆にのぼされた所感や、城内や近郊で明末には空き地であったところが清朝前半期には地価の高騰をみたという史料の記述のほか、同時代人が写実の手法によって蘇州の経済、文化の繁栄ぶりを描き出した歴史絵巻を、われわれは目にできる。多くの人びとによって賞賛されてきた『盛世滋生図』である。

『盛世滋生図』は『姑蘇繁華図』ともいわれ、乾隆24年、著名な宮廷画家徐揚が描いた作品である。徐揚は字雲亭、蘇州府吳県の人であり、専諸巷に居住していた。乾隆16年、監生の身分をもっていた40歳の徐揚は朝廷に画冊を献納し、皇帝の特命によって画院に入り、乾隆18年には挙人を受けられた¹⁰⁾。のち、内閣中書となり、ながく清朝の画院で仕事をした。乾隆帝が二度目の南巡をおえたのち、乾隆24年、徐揚は清朝の「治化の昌明なること三代を超軼し、幅

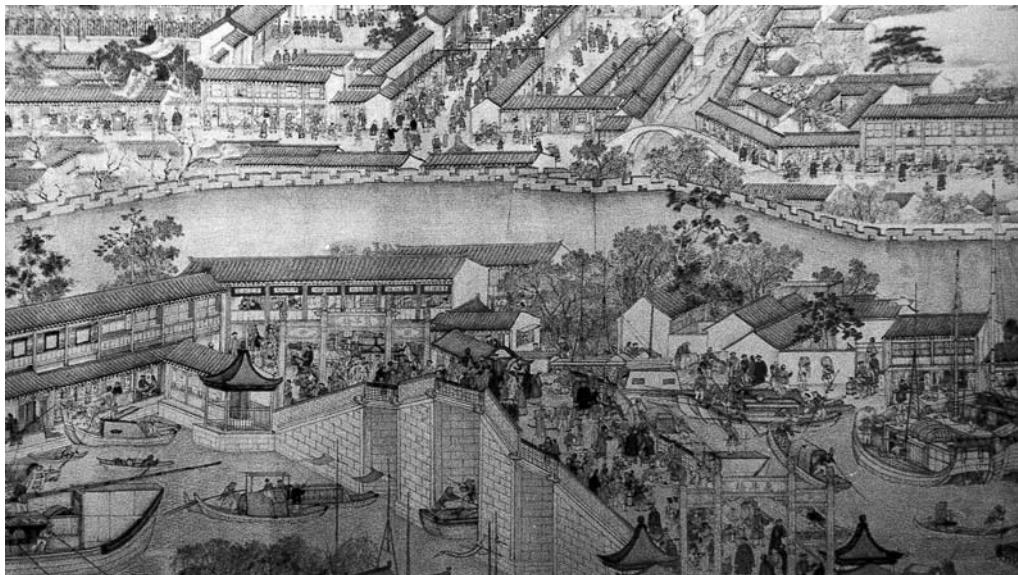


図 1

清代蘇州都市文化繁栄の実写（范）

員の広、生歯の繁、亘古いまだ有らざる」ことに感じて「帝治を摹写する」ことを発念して『盛世滋生図』一巻を描きあげた¹¹⁾。乾隆29年、徐揚は『南巡図』を描けという帝命を奉じ、七年をついやして絹本12巻におよぶ大作を描きあげた。乾隆36年にはふたたび宣紙本『南巡図』十二巻に着手し、乾隆40年に完成、蘇州の織造に玉撤、袱匣を作らせた。乾隆36年、普陀宗乗之廟が落成すると、徐揚は他の如意館の絵師とともに堂内の絵画を完成させた。乾隆帝の「御製詩」によると、徐揚の作品はつねに皇帝の鑑賞と賞賛を博していたことがわかる¹²⁾。『石渠寶笈』が著録する徐揚の作品は35点にのぼるが、主要な作品としては『南巡図』（十二巻）、『盛世滋生図』（一巻）、『平定回部獻俘礼図』（一巻）、『西域輿図』（一巻）、『聖製見新耕者詩意図』（一巻）などがあり、これらは御書房、乾清宮、養心殿、懋勤殿、静宜園、静宜軒、延春宮、静寄山庄、重華宮などに藏されていた。『盛世滋生図』は御書房所蔵であった¹³⁾。乾隆37年、徐揚は内閣中書を六年つとめて俸満となり、上旨によって主事の任用候補者に名をつらね、内閣典籍の任をうけたのち、乾隆40年に刑部山西司主事に陞任した¹⁴⁾。

『姑蘇繁華図』は、全長1241cm、高さ39cmの長巻、彩色紙本である。描繪の範囲は、「靈巖山からはじまり、木瀆鎮から東に向かい、横山、渡石湖をとおり、上方山をへて、太湖北岸の介獅、和（何）両山間より、姑蘇郡城（蘇州府城）に入り、葑、盤、胥三門から閨門外に出て、山塘橋に道を転じ、虎丘山まで行く。その間、城壁と水堀の峻厳、官庁の壮大、山川の秀麗、往来する漁師や木こり、多くの農民や織工、数えきれない商人と軒を連ねる店舗、……春の祭りに長寿を言祝ぐには、年長者からはじめ、婚を通じる両家がめでたく婚礼の時をむかえる。三本の蠟燭のもと、童子（受験生）を集めて生員の選抜試験がおこなわれ、万巻の書香ただようなか、先生の授業を受ける。耕す者は田野に歌い、行く者は道に詠う、熙暉の風」¹⁵⁾といった情景が、長巻のなかでさまざまに描きだされている。大まかに数えて、賑わいのなかを道に溢れんばかりに往来する人はおよそ12000人。水に浮かぶ船の帆が雲のように連なり、官船、荷

船、客船、物売り船、画舫、木や竹の筏などは計400艘に近い。街道上には商店が林立して看板が高く掲げられ、各種の看板を掲げる店舗が260軒ほど¹⁶⁾。各様式の橋梁50あまり、演藝の場面が十ほど。清朝盛期、蘇州の高度の文化をあますところなく再現している。以下、文献資料と結び合わせながら、二つの方面にわけて『姑蘇繁華図』を紹介しよう。

—

『姑蘇繁華図』が作成されたのは乾隆24年、これは乾隆22年に乾隆帝が二回目の南巡をおこなった後である。描かれた場所、とくに胥門から山塘街にかけては、文献の記載も多く、当地の人が誇りとし、外地の人があこがれる蘇州でもっとも繁華な商業文化地区であった。蘇州が明代中期より工商業の発達を見たことはよく知られているが、それは東、西二つに分かれていた。城内の東半は絹織物など手工業生産が盛んであり、西半は商品流通と商業交易が盛んであった。「おおよそ四方難得の貨、有らざるところなく、……天下の財貨は蘇州より盛んなるはなし」¹⁷⁾といわれた。嘉靖初年の呉県志には、「運河は漕河ともいい、府城西側をめぐり、……漕河の閨門北船つき場から胥門の館駅にいたるまで五、六里の間は、東西両岸に民居が建ちならぶが、西岸がもっとも繁榮している。……たいてい漕河では湖北、四川方面の大船が東側に停泊し、塩運搬や商人の船が西側に停泊する。官船の鉦鼓は昼夜絶えることなく、満艦飾に音曲つきで河遊びをすることも禁じられない。西閨の盛んなことは、唐代以来である。ここより釣橋を過ぎると、水は北に向かい、南濠より楓橋までの十里ほどは人々がつづく。楓橋がもっとも賑わっている。長江の上流や江北から運ばれる菽麦、綿花の取り引きはここが中心である」¹⁸⁾と見えている。蘇州府城内の西半では、とくに胥門から閨門にいたる間がもっとも繁華である。呉県志はさらに言う。「城中は呉県と長洲県が分治するが、東に比べて西が賑やかであり、住民はなかば職人である。金閨亭、閨門一帯は商家が連なり、城壁沿いには仲買人が集ま

る。胥門、盤門の内側は府や県の官府に近く、衙役や使い走りが多い。知識人の家族が多く宅をかまえるのは閻門の近くである」¹⁹⁾。また、「蘇州人はおおむね田畠をもたず、商品を集積して商人を呼びこむ。閻門、胥門のあたりは、錦繡を敷きつめたよう。贅をつくした宴会と華麗な服装を競いあい、わずかな利益をめぐって角逐するが、儲けにはならない」²⁰⁾ともいう。明代中期、蘇州の名士唐寅は、人口に膾炙した『閻門即事』詩を作った。いわく「世間の樂土、是れ吳中、中に閻門ありて又た雄を擅^{ほししまさ}にす。

翠袖三千、樓を上下し、黄金百万、水を西東す。五更も市賈なんぞかつて絶えん、四遠、方言は総べて同じからず。もし画師をして描きて画を作らしめんとするも、画師はまさに道うべし、画は工みなること難し」²¹⁾、と。明末まで、城中の月城市は「両京各省の商賈が集まるところ」であり、上塘、南濠は「市がとくに繁盛し」、当地の人は閻門を「あでやかな服装は雲のつら

なりのよう。肩を触れ合い車軸をぶつけ合い、楓江は舳艤がつらなり、南濠の貨は山のよう」²²⁾といわれた。清代になると、人は「楓橋の米豆、南濠の魚塩、薬材、東西匯の木簰は雲のように広がり山のように積む」²³⁾といった。閻門胥門の間、南濠から山塘への路は商店がさらに繁盛した。康熙末年、翰林院檢討孫嘉淦は江南に遊び、閻門の市肆によほど印象が強かったのであろう、「閻門の内外、居貨は山のように積み、行人は水のように流れ、居ならぶ店々の看板は燐然としてつらなる錦のよう。その繁華については、北京も及ばない」²⁴⁾と賞賛した。納蘭常安は、さらに南濠の商品の多さに驚嘆し、「南廝は蘇城閻門外にあり、水陸衝要の区である。およそ南北各地の舟車、外洋交易の商人はみなここに畢集する。居民は稠密であり、街街は幅がたらず、外地の商品が到着すると、往来の人は腕を擧げることもできない。……近ごろ人は蘇州、杭州を繁華の府として並称するが、杭州人は営業にうとく、

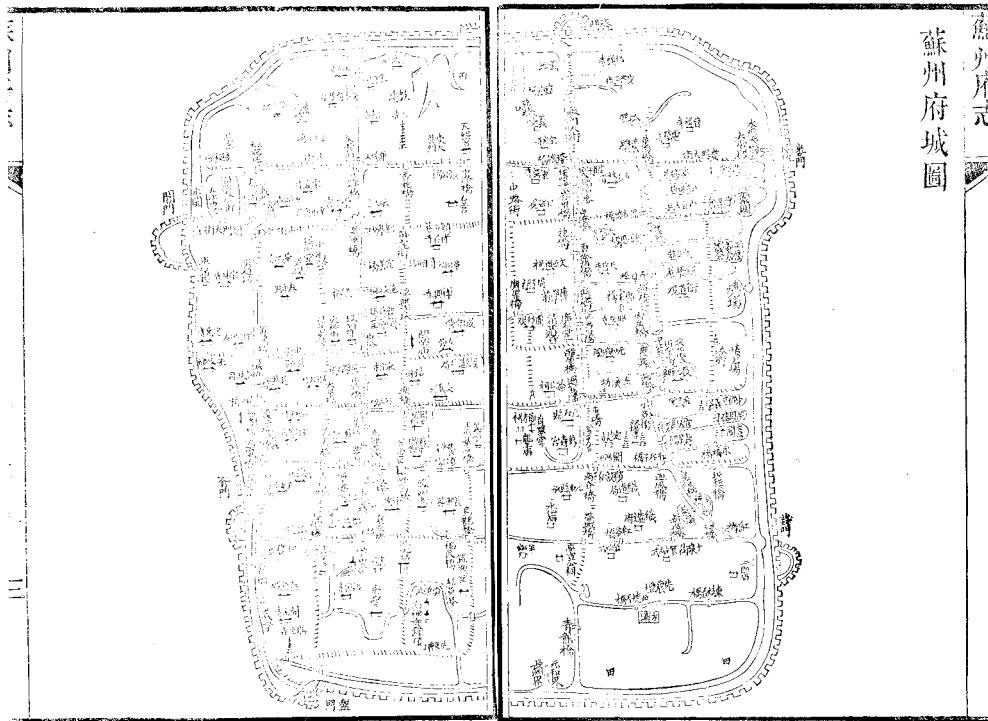


図2

本「蘇州府城図」は道光(1824)序『蘇州府志』(京都大学人文科学研究所所蔵)所収のものを使用した。

清代蘇州都市文化繁栄の実写（范）

東に寄りすぎている。おおよそ各地遠方から船で商品を持ちこむ者は、杭州に停泊しても、積み換えて蘇州に運びこみ、そこで荷をといて売りにだし、杭州に転売するのである。嘉興府、湖州府の生糸から織物、綾絹までみな蘇州にそろい、価格も高くない。もしも生産地まで赴いて買入れると、値段はかえって高くなり、品質もよくない²⁵⁾と述べた。蘇州は商品生産の中心であるばかりか、全国の商品、とりわけ江南各地の商品の集散地であった。

『姑蘇繁華図』にあらわれる生糸絹織物の店舗は14軒である。「綢緞莊」「綿綢」「富盛綢行」「綢緞袍褂」「山東繭綢」「震沢綢行」「綢莊、濮院寧綢」「綿綢老行、湖綢綿綢」「山東沂水繭綢發客不誤」(間口五間)。「上用紗緞、綢緞、紗羅、綿綢」「進京貢緞、自造八絲、金銀紗緞、不誤主顧」(二階建て、間口三間)。「綢行、緞行、紗行、選置内造八絲貢緞發客、漢府八絲、上貢綢緞」(二階建て、間口五間)。「本号挑選、漢府八絲、妝蟒大緞、繭綢、宮綢暉曇羽毛、等貨發客」(間口七間)。「本店自家製蘇杭綢緞紗羅等口綢綢梭布發客」(間口三間)。これらの宣伝文句は、基本的に当時の江南で生産される絲綢の品種と絲綢業の生産形態の全貌を反映している。呉江県震沢鎮、湖州濮院鎮はどちらも綢の産地として名高く、その產品はそれぞれ「盛綢」と「濮院綢」とよばれた。「湖綢」は湖州府の特産品だった。杭州は、各種の絲綢をすべて生産したが、とくに「杭綢」が有名であった。「繭綢」は山東の特産であり、山蚕(柞葉を食する蚕)の絲で織ったものであるため、「繭綢」または「山繭綢」とよばれ²⁶⁾、風合いはごわごわしているが、丈夫で長持ちする。当時、山東全省で繭綢の生産が盛んであったが、沂州府の沂水県や沂水一帯で生産される繭綢がとくに有名であったわけではない。各地で生産される各種の絲綢が、大量產品であろうと稀少產品であろうと、いずれも蘇州で売りにだされていたことは、蘇州に集まる絲綢の種類がいかに多かったかを示している。蘇州の綢緞で乾隆時代にもっとも有名だったのは「黃宏成綢緞」である。乾隆22年の第二回南巡の時に蘇州の店舗を記した『江南省蘇州府街道開店總目』²⁷⁾には、25の店舗が記されている(そのうち宣伝文句がないのは一軒だ

けである)。はじめの店は「發各省綢緞紗羅」という看板の公茂号であり、12番目の店は「定織妝蟒朝衣補服」を看板とする松茂号である。当時、外地の絲綢商人にとっても、蘇州は絲綢を売りだす大本営であった。たとえば湖州商人は蘇州で綢と綢の二つの業界をつくっており、乾隆54年には呉興会館を建設した²⁸⁾。杭州商人は絲綢を全国各地にむけて売りだすさいに、「とくに呉の閻門を繡市とした」のであり、杭線会館から独立させて、乾隆27年には単独で錢江会館を建設し、乾隆23年から41年の間、26軒の絲綢店が会館に寄付した金額は1万1千両あまりにのぼった²⁹⁾。徐揚が作画したのは、ちょうどこれら絲綢商人がもっとも活躍していた時代であり、だからこそ各地の「綢緞紗綾はみな蘇州にそろい、価格も高くない」のであった。「綿綢」は、絲くりに使えない繭から綿(まわた)をつくり、綿から捻りだした糸で織った低級の絹織物であり、蘇州郊外の洞庭西山や嘉興、湖州の各地で生産されていた。「緞」、「紗」はともに絹織物の種類で、「織文様のあるものを緞といい、方孔を紗という」³⁰⁾。緞は隣りあつた二本の経糸または緯糸の単独組織点が均等に分布しているけれども連続することはない織物であり、紗はすべてのあるいは部分的に、経糸を絞つて均等に孔が分布する紗組織を採用した織物である。いわゆる「上用」、「内造」、「進貢」などは、もともと官営の織造局が宮廷のために生産した綢緞をさすのだが、ここでは貢品を商品として売りだしていたのではなく、当時の民間では「貢品」を高級品の代名詞としていたのであり、民間の織り元でも「貢品」の文字をつけることで高級品であることを標榜して売りだしていた。「漢府」は、清代に江寧織造局があった場所である。「八絲」は透かし模様の緞、「妝蟒」^{みずち}は蟒のデザインがある織物、「妝花」は江南産の錦の代表的なものであった。龍の文様は御用の品にのみ許され、民間では蟒しか使うことができなかった。このため、宣伝文句には「妝蟒」といったのである。「宮綢」は宮中で生産された織物を意味する。ほんらいの意味における「宮綢」の多くは、宮廷で祝典をおこなうさいの装飾に用いられたものである。その他各種の錦、緞など、すべて蘇州で大量に生産された。「自

造」、「本号」、「本店自製」などというのは、実際には「賬房」である。こうした賬房はもっぱら綢緞を販売するだけの店舗とはことなって、生産もおこない、商業資本と産業資本が結合した性格を備えていた。こうした賬房は、蘇州では「紗緞莊」あるいは「紗緞号」とよばれ、生糸・絹織物業のなかでは主導的な地位を占めていた。乾隆年間は、まさに賬房が急速に発展した時期であった³¹⁾。『姑蘇繁華図』に見えるこれらの看板は、当時の蘇州生糸・絹織物業の複雑な生産形態のあらわれであり、具体的にそれを反映したものであった。

『姑蘇繁華図』が描く棉花・棉布業は23軒ある。「布行」(4軒)。「大布」。「崇明大布」。「松江標布」。「青藍梭布」。「松江大布、本客自置布匹」。「布行、斜紋布行」。「京蕪梭布」。「松江加長扣布」。「大布、本荘扣布」。「定織細布」。「大通号、松江大布」。「布行、加長 著梭布、不二価」。「布行、自置松江青藍大布、加長大布」。「太倉棉花」(3軒、うち1軒は間口三間)。「棉花行」。「永盛棉花」。「子淨棉花」。これら絵巻物中の棉花、棉布の名称はすべて現実と合致していた。松江府、太倉州は清代でもっとも有名な棉布生産の中心地である。大布は標布の俗称であり、幅広で織り目が細かく、上海の三林塘で織られるものがもっとも有名であった。当時の市場では、標布は「小布にくらべてやや幅広、十六尺を平梢といい、二十尺を套段といった」³²⁾とあり、あるいは「小号では幅が八寸三分、長さ十八尺、大号では幅が九寸五分、長さ十九尺」³³⁾と説明されている。扣布は刷線布のことであり、上海や南匯などでは小布と呼ばれていた。「織りが密であり、幅は狭くて短い」³⁴⁾が、「光沢があり厚手であるので、衣服や蒲團にすると長持ちする」として、外地からの商人に重視されたものである³⁵⁾。松江や嘉定などで生産された。清初の松江の人葉夢珠が、小布は長さ1丈6尺にすぎないと紹介するのは、布の長さと幅の規格が中機布とおおむね同じであり、このため南匯などではそのまま中機布と呼ばれていたからである。嘉定、上海では一種の飛花布や娘子布と呼ばれる布を作っていた。「紗はかならず均一に細く、織りの技術も精巧であり、価格は普通の布より高く」、長さ1丈6尺、幅9

寸3分であった。規格は小布と同じか、やや小さいので、嘉定の人はこれを小布と呼んでいた³⁶⁾。小布のなかで上等のものが「細布」であり、加長大布は加長標布、加長扣布は加長小布であるらしい。松江、嘉善の境界ちかくで織られる小布は長さ2丈2尺であり、加長小布がこれにあたる。青藍梭布は、じつは青布と藍布、ともに高級棉布であって、清の朝廷は蘇州織造に命じて江南で買い取りをおこなわせていた³⁷⁾。織りは緻密、幅はひろくかつ長い、つまり加長布であって、価格はとりわけ高かった。康熙中期に青布は一匹あたり5銭2分9厘、藍布は一匹あたり4銭7分9厘、通常の棉布に比べると倍以上の価格であり、三林塘で生産されるものがもっとも上等であった³⁸⁾。当時、市場で売られていたのは、扣布(小布)、大布(標布)と稀布の三種の布であった。稀布は、「織りの目があらく、幅広で長い」ものだが、評判は良くなく、絵巻物にはその看板は見えない。斜紋布は紋様によって名づけられた。「経糸は真っ直ぐで緯糸は斜めにし、波紋様や円形紋様を織りだし、遠目には『縞^{ピロード}』のように見え」、荷造りして売りにだされると、外地の商人は「みな比類がないと驚き」、北京および各省でよく売れた³⁹⁾。主産地は嘉定の婁塘や羅店などであった。京蕪は京口(鎮江)と蕪湖のことであり、いずれも染色布の名産地であった。太倉州は優良棉花の産地であり、とりわけここに属する鶴王市産のものが優れており、「他郷のものと比べると、しなやかで強く、色は白く、木棉の花には朱色の斑点があり」、福建・廣東の商人が棉花を運んで売りにだすさい、市場ではかならず「鶴王市棉花」と書いたのであった⁴⁰⁾。絵巻物には三箇所に「太倉棉花」の看板が見えるが、これは売っている綿花の良品であることを示すものであった。子淨棉花は棉の核を取り除いた繰棉であり、皮棉ともいった。「本客」とは店舗を指すのではなく、棉布字号を指す。棉布が織りあがっても、なお「端^{つやだし}」、「染^{そめ}」などの加工が必要である。布商は棉布を買い取ったのちに、さらに工賃をだして端坊や染坊に加工を委託し、それが済んでから布を統一規格にしたがって梱包し売りにだすのであり、棉布の買い取り、端染の加工を委託し、大口の卸取り引きをする規模の大きな商業資本

清代蘇州都市文化繁栄の実写（范）

であった。清代の江南の棉布字号は、基本的に蘇州に集中し、とりわけ閻門上塘街、下塘街に集まり、いわゆる「蘇布の名は四方に称えられ、この業を習うものは閻門外の上下塘にあつまる。これを字号といい、漂布、染布、看布、行布それぞれ担当者を有している。一軒の字号につき、数十家が生活の糧をえているのが普通である」⁴¹⁾。康熙9年から乾隆60年まで、蘇州の府と県の官府は計八回にわたり、字号の請願にこたえて踹匠の強請を禁止する碑を立てたが、これらは閻門外の広濟橋のたもとにあった。道光年間の踹匠の独占と強請を禁止する二つの碑もやはり閻門外の上塘街にある新安会館に立てられていた。康熙38年、徽州府休寧県の人陳士策が創業し、のち徐揚がこの絵を描いたときにお存在していた万孚字号は、閻門外の上津橋にあった⁴²⁾。絵巻物中に「本客自置布匹」という看板が閻門外上塘街の二階建ての建物に高くかかげられている。「本客自置布匹」とは、布店字号による加工をへた棉布という意味である。

「本荘」とは棉布を買い入れる布荘を指している。明代、外地から来た商人は、しばしば布牙に委託して棉布を買い入れた。清代になると、棉布経営の競争が激烈になるにともない、字号は生産地の市鎮におもむき直接に買い入れるようになった。当時、これを「出荘」といった。棉布生産で有名であった朱家角鎮の本色布は、「南翔、蘇州両処の荘客が買い入れた」⁴³⁾。このような棉布字号は、乾隆4年には45軒あり、なかでも明代後期にはすでに存在していた汪益美字号の営業高がもっとも大きく、一年間に百万匹の棉布をさばいた。益美的棉布は天下に行きわたり、雲南からモンゴル高原まで、どの土地でも益美的品は歓迎されたのである⁴⁴⁾。「永盛」、「大通」は商店の屋号であった。生糸・絹織物業と同じく、蘇州が棉布生産、加工と販売の中心であるという特色は絵巻物のなかにある程度反映されている。

絵巻物のなかに染料店と染色業は4軒みえる。「染坊」（3軒）。「銀硃、丹粉、各種顔料」。明代後期より、蘇州は染色業の中心としても有名になった。染坊は生糸・絹織物と棉布および各種の色糸を染めていた。湖州と盛沢、濮院などの城鎮で織り上げられた白絹、松江、太倉や

常熟などで織り上げられた棉布は、おおむねすべて蘇州に運んで染色するのが普通であった。このため三大官営絹織物生産の一つであると同時に棉布加工業の中心でもあった蘇州は、清代になると染色業がさらに発展した。康熙59年、蘇州城中で専業の染坊と、字号が兼営する染坊は64軒に達していた⁴⁵⁾。雍正年間、染めの職人は七、八千人から一万人あまりへと増加し⁴⁶⁾、染坊も数を増やしたはずである。当時、蘇州城中の染色業界ではすでにはっきりとした分業がおこなわれ、もっぱら藍、黒など深い色に染めるものを藍坊、元（坊）といい、浅い色に染めるものは浅坊、青色に染めるものは青坊、黒色に染めるものは大紅坊、とりどりの色に染めるものは雑色坊と呼ばれた⁴⁷⁾。これらの染坊は、もともと閻門と虎丘一帯に分布していた。康熙59年に染色業者の請願の石碑が広濟橋のたもとに立てられた。康熙・雍正年間、山塘から虎丘にいたる運河には染坊が多く集まっていたため、「河全体が青や紅や黒や紫色となる」という深刻な環境汚染をひきおこし、土地の人士が連名で染坊の開設を禁止するよう求めるという事態にいたった⁴⁸⁾。乾隆初年、かなりの数の染坊は、流量が大きく汚染されにくい婁門外に移転したようであり、地方の文献には、「染作は婁門にあるが、また各処にある」⁴⁹⁾とみえる。徐揚の絵巻物の中にも染坊の看板が描かれている。

『江南省蘇州府街道開店総目』の22番目の店は「大紅切巧色染坊」の広聚号である。染坊が使う顔料を供給する顔料舗は、乾隆年間、無償で官府の仕事をさせられることを願い下げる要求に名を連ねた蘇州城内の店だけでも33軒を数え、その碑文はやはり広濟橋のたもとに立てられた⁵⁰⁾。徐揚の筆では、「銀硃丹粉各種顔料」という看板が、閻門下で三方向に間口を開いている建物に横に架けられている。徐揚のこの絵巻物はまったく現実のとおりに描かれていたことがわかる。

絵巻物の中には蠟燭業が5軒ある。「香燭」。「進京蠟燭」。「牛油蠟燭」。「福興号、自選進貢柏油堅燭、香燭紙馬、進京蠟燭」。「牛油燭」。ここでいう香燭とは香と蠟燭の二つを指している。蠟燭は照明用であると同時に迷信のための品物でもあり、庶民の日常生活とふかく関係し

ていた。その原料は主として牛油と烏柏樹の実であった。蘇州の蠟燭業はきわめて繁盛し、しかもほとんどが浙江の紹興商人が經營していた。道光初年、紹興人は「元和、長洲、吳県の各處で蠟燭を作る店をかまえ、城内と郊外に百軒あまりあった」。道光8年になんでも蠟燭業の店舗は49軒あった⁵¹⁾。これら同郷同業の紹興商人は、拠金して金蘭会を創設し、その建物は金闇南洞子門外にあった。さらに道光2年には東越会館を創立したが、この会館は閨門外三樂湾にあった。柏油業は嘉慶24年に閨門外水信巷に土地を買い、のちに柏油公所を設立した⁵²⁾。蠟燭業と柏油業が活躍した場所は、まさに当時徐揚が「牛油香燭」の看板を描いた一帯であった。

絵巻物中には酒屋が4軒ある。「酒坊」(2軒)。「燒酒」。「三益号自製名酒」。「酒坊」、「燒酒」、「自製名酒」の類はおむね造り酒屋である。蘇州の酒は、十月に造られるものがもっとも清冽であり「十月白」と呼ばれた。木香、豆蔻、金橘を加えて醸造した「蘇州酒」も有名であり、「香冽超勝」と書かれた瓶に詰められて、遠近各地に売られた⁵³⁾。乾隆初年、木瀆鎮一帯では当地の優良な米を原料として蒸留酒がさかんに造られ、これを「米焼」といい、大きな利益をあげていた⁵⁴⁾。蘇州でもっとも有名なのは清らかな水と白こうじと白米を原料とする「三白酒」であった。『江南省蘇州府街道開店総目』の5番目は「精造進京三白酒」の源盛号であった。委託をうけて販売するのは酒行であり、道光年間に醴源公所が創立されていた⁵⁵⁾。

絵巻物中の涼席業は6軒ある。「虎邱名席」、「定織細席」。「虎邱名席、細席」(間口二間)。「定織細席」(3軒、うち1軒は間口二間)。「蘆席老行」。虎邱産の席草で編んだ席が有名になったのは明代からである。正徳『姑蘇志』は「席、虎邱産のものが佳い、その次は滸墅産。さまざまな色を交えたり、花草人物を織りこんだり、廉にあるいは座席に用いる」⁵⁶⁾。清代の虎邱の席は明代よりも盛んとなった。「山の周囲の居民は多く席草を植え、席を編むのを業としている。これは各地で虎鬚席と称され、極めて巧みに作られており、他の産地の及ぶところではない」⁵⁷⁾。康熙年間、虎邱にはこれ専門の席草行が開

かれた。虎邱寺の西、席編みがさかんな所には席場弄があった。席の種類もひじょうに多く、「その名称には五尺、加闊、満床、独眠の区別があった。あらゆる坐具、枕几、さまざまの大きさのものが、すべて[注文の]様式にしたがつて作られた」⁵⁸⁾。長期にわたる生産過程のなかで、揃草、打草、織紋、印花といった一連の技術が生みだされ、「すべて[注文の]様式にしたがつて作られた」とは、顧客の要求にもとづいて編まれたということを説明している。実際、虎邱の市における席は、当地で生産されたものばかりでなく、附近の光福、滸墅、黃埭、望亭などの農村や市鎮で生産されたものを集めていた⁵⁹⁾。『姑蘇繁華図』で山塘から虎邱までの間に三軒の席店が描かれている。店中にはさまざまの席が架けられており、まさしく当時の虎邱で草席生産の盛んであったこと、多くの商品を集めていたこと、名声の大きかったことの象徴である。絵巻物中の看板の多くが虎邱名席は「注文におうじて編む」ことができると標榜するのは、やはり当時の生産の方法を反映しているのである。

油漆、漆器業は5軒ある。桐油(2軒)。「桐油、生漆」。「盤盒、漆器」。「漆器、盤盒、自製嫁妝漆器、招牌老店」。蘇州の漆器は玉器と同様に有名であり、漆作には明光、退光などの分業があり、剔紅、剔黒、彩添などすべて精巧であった⁶⁰⁾。道光17年、蘇州の漆業者で性善公所に寄付をした人数は500名にも達しており、そのうち閨門の上下塘に住むものだけでも97人を数えた⁶¹⁾。漆器漆業の経営者は主として江西人であった⁶²⁾。

銅、鉄、錫器業は5軒ある。「銅器」(2軒)。「釘鉄」。「成造田器」。「錫器老店、精巧錫器」。乾隆年間、蘇州の銅、錫、鉄器など冶金業の職人は多くが無錫から来たのであり、少なくとも十数軒がそうであった。銅業には打銅行などがあった⁶³⁾。王東文銅錫がもっとも有名である。絵巻物で「成造田器」の宣伝をたなびかせている鍛冶屋は、石湖越城橋のたもとにあり、炉は赤く燃え、二人の鍛冶が農具を鍛造している。『江南省蘇州府街道開店総目』の10番目は「精造銅錫器皿」の大盛号であった。

金銀首飾珠宝玉器業は8軒ある。「金珠」。

「金珠老店」。「穿点翠」。「金銀首飾」。「口文斎金銀首飾」。「兌換金珠、金銀首飾、首飾老店」（二階建て、間口三間）。「定灑上赤金箋、上赤真金」。「玉器、古玩」。蘇州の金業あるいは金珠鋪戸は円金業界をつくり、嘉慶初年には円金公所を創設した。後に金箔製造を専門とする業者は麗沢公所を創立した。金銀首飾の製作をするのは銀樓業と称し、同治年間に安懷公所を創設した。『江南省蘇州府街道開店総目』の7番目は「便商兌換傾銷銀鋪」の聚茂号である。べつに銅器あるいは銀飾包金の加工を専門とする業界があり、それぞれ仕事を分けて、たがいに領分を越えることはなかった⁶⁴⁾。天宝樓首飾、王信益珠宝がもっとも有名であった。蘇州の玉器製造業はとりわけ発展していた。作坊はおもに閨門の專諸巷と天庫前吊橋一帯にあった。雕琢された玉器は、地肌がしとやかな輝きをもち、立体の器物でも玉佩の類でも、造型は独特であり、輪廓はくっきりしていた。薄手の作品では、厚薄が均齊をたもち、すかし彫りの玉器には、卓越した技巧が發揮された。乾隆年間、新疆のヤルカンドなどで玉石の密輸事件がおこったが、その玉石はすべて蘇州で雕琢され、それから各地に売りにだされたのであった⁶⁵⁾。蘇州の玉器は古くから盛名を響かせており、清廷の御璽、玉冊、玉宝および机上を飾る各色の玉器は、つねに蘇州で雕琢された。骨董は清朝前半期の蘇州できわめて隆盛した市場をもっていた。その場所は主として專諸巷であった⁶⁶⁾。清代の蘇州では、士大夫官僚たちの三大嗜好のひとつが「骨董談義」であった。骨董をやるのが蘇州では流行のひとつであった⁶⁷⁾。『江南省蘇州府街道開店総目』の4番目は「文房古玩」の姑蘇仿古斎であった。

衣服・鞋・帽・手巾業は14軒ある。「成衣」。「衣莊」。「衣莊發客」。「大茂号衣莊、不二価」。「原營衣莊、照号發客」。「三進斎朝靴」。「靴店」。「三進斎靴鋪」（間口三間）。「三樂斎鞋襪店」。「手巾」。「自製包頭手巾」。「手巾老行」。「手巾扇子」。「帽鋪、帽行、帽鋪朝冠、冬夏絲綢朝冠、不誤主顧」。明代万暦年間の杭州の人張瀚はいつている。「四方で呉の服が重んじられ、呉ではいよいよ巧みな服がつくられる」⁶⁸⁾。蘇州の服飾は、明代以来、全国のモードをリードした。乾

隆45年、蘇州の縫製業は閨門北の正三団に公所を設立した。太平天国の戦乱によって焼失したが、戦争後には場所を移して再建された⁶⁹⁾。縫製業のうち寿衣（死装束）業は、道光年間に安仁公所を創設した。古手業は、咸豐年間に雲章公所を創設した。帽業は蘇州では瓜帽業ともいい、道光年間に公所を創設した⁷⁰⁾。公所を作るのはその業界の実力の象徴であった。徐揚が作画した乾隆20年代は、まさに蘇州の縫製業の隆盛期にあたっており、しかもその場所は絵巻物に描かれた範囲のなかにあった。このため徐揚は閨門一帯に数軒の衣莊を描いている。『江南省蘇州府街道開店総目』の21番目は「京式朝冠」天奇斎であった。世春堂油鞋、錦芳斎荷包、三珠堂扇袋、張漢祥帽子、朱可文香飾、吳竜山香粉、黃國本手巾、李正茂帽緯はすべて服飾業の有名ブランドであった。

図書字画・文房具業は10軒ある。「法帖」。「筆莊」。「湖筆」。「紙張發客」。「考試試卷」。「狀元考具、三場名筆」。「大雅堂書坊、古今書籍、書坊」（二階建て、間口二間）。「名人字画」（2軒）。「裝潢」。大雅堂書坊のなかには書籍がうずたかく積まれている。蘇州は著名な文化の中心であり科挙の人材の中心地であった。刻書・印書、紙加工はきわめて隆盛し、模擬答案集の評判はなり響き、文士たちの活動も活発であり、文化市場はとりわけ発展し、受験生・学生、商売人および外国の朝貢使節がたえずそこで文房具と書籍・字画を購入した。清代の出版は、「吳也、越也、閩也。……その精確においては吳がまさり、……値段の高さにおいても吳がまさる」⁷¹⁾。蘇州の出版は品質において最優秀かつ価格も最高であった。康熙49年、蘇州織造の李煦は二度にわたって帝旨にしたがって御批『資治通鑑綱目』1600部を印刷した。康熙55年までに幾度も康熙御製詩集を刊刻した⁷²⁾。錢泳も蘇州の刻書の品質は以前ほどではないにせよ、「康熙、雍正、乾隆の三代に刻された書、たとえば『佩文斎書画譜』、『駢字類編』、『淵鑑類函』および『五礼通考』などの書は、なお名手による」⁷³⁾と評価している。大雅堂書坊は明代以来有名な出版元であり、万暦24年薛瑄が著した『薛文清公讀書全錄類編』と崇禎8年に黃道周が編纂した『博物典匯』の二書は大雅堂が刻印したも

のである。乾隆年間、閻門の附近には文雅堂書坊という出版元があり、商業書『示我周行』などの書物を出していた。『江南省蘇州府街道開店総目』の8番目は、益智堂書坊であった。書画藝術は蘇州人が第一と称された。いわゆる「藝事は呉門を推す」⁷⁴⁾である。装潢はじっさいには書画の表装のことである。蘇州は書画業が發展したことにより、表装業でも海内に突出することになった。素材は上質、刷毛づかいが均一で、のり付けはしっかりとし、手間をかけるので、名画もひとびと蘇州で表装されれば、価格が倍になった。乾隆年間、「おおよそ海内外宋、元、明人の書画を入手した者は、かならず蘇州の職人に表装させた」。秦長年、徐名揚、張子元、戴匯昌などの名手高手が名を響かせていた。錢泳が「表装は本朝が第一であり、各省では蘇州の職人が第一である」⁷⁵⁾といったのもこの故である。蘇州の表装職人のなかには、杭州、揚州、北京などの大都市で活躍するものもあった。画舗は山塘街、桃花塢、北寺塔前などに集中していた。桃花塢と北寺塔のものが印板や刻印のものであったのとは異なり、山塘街の画舗の大軒小幀はともに肉筆画であり、描かれていたのは天官、三星、人物故事および山水、花草、翎毛など、美人画はとくに精巧であった⁷⁶⁾。紙加工は宋代以来、彩箋で有名であった。清代では、徐揚が描いた乾隆20年代、蘇州には印紙作坊が34軒あり、分業がこまかく、丹素、胭脂、紅金、巨紅、箋金、丹紅、砂綠、山木紅、藍などに染印した各色の紙が並んでいた⁷⁷⁾。『江南省蘇州府街道開店総目』の17番目は「選料名紙花箋發客」の芳風館であった。湖筆は湖州から来た。紙は江西、安徽、福建などの省から来た。康熙57年、福建省上杭県の紙商の一部からなる六串紙幫が、閻門外の上津橋東集に汀州会館を創建した⁷⁸⁾。その実力は並みではなく、蘇州の紙需要の巨大さを窺わせる。嘉慶元年、蘇州の江西商人が会館を建設した。寄付者のなかには南昌府の紙貨商たち、山塘花箋紙の商人たち、徳興県の紙貨商、桐城県の紙商などが見える⁷⁹⁾。乾隆時代、青蓮室書箋、錢葆初、沈雲峰筆はみな著名产品であった。「三場名筆」、「状元考具」などはすべて科挙の試験用具である。蘇州は科挙がもっとも盛んな土地であり、これらの品物も

おのぞと揃っていた。

灯籠業は5軒ある。「灯店」、「灯局」、「灯籠」。「灯籠老店紗灯」、「専辦各種紗灯、雅式紗灯」。蘇州で造られた灯は宋代以来有名であった。蘇州には蝉のはねのように薄い紗もあり、各様式のぼんぼりも大いに異彩をはなっていた⁸⁰⁾。このほか琉璃燈もあった。当初、廣東から伝わったのであるが、蘇州人は割れたガラスを炉にいれて溶かし、さまざまな様式の挂灯、臺灯を作成した。大小さまざまであり、その市場はやはり山塘に集中していた⁸¹⁾。

竹器業は4軒ある。「竹器」(3軒)。「精工竹器」。沈朝初『憶江南』詞に「蘇州好し、竹器は半塘ものが精。卍字欄干に麋竹の榻、月彎の香机、石棋枰。斗室に置くには軽きがよろし」。蘇州で作成された竹器は、「机榻、桌椅、廚机および小兒の坐車、搖床、床欄、熏籠、桌面、すべて軽便で好ましい」。竹器店の多くは半塘の普濟橋一帯にあった⁸²⁾。もともと竹を彫刻して作る筆筒、棋子、墨床などの文房雅玩は嘉定産のものが有名であった。清代前期に山塘街に移転したのである。

陶磁器業は7軒ある。「窯瓷器」(2軒)。「時款瓷器」、「本窯缸壇發客」。「遷製官窯各款瓷器」。「碗器」、「磚瓦石灰」。瓷器の多くは江西景德鎮から運ばれ、多くは江西人が經營していた。いわゆる「豫章は瓷器、竹、紙」を主としたと言われたとおりである。蘇州の窯業は、城北の齊門と北郊の陸墓一帯にあり、「堅く緻密なことは他處に比類ない」⁸³⁾、明代以来、工部からの発注によって選りすぐりの品を生産していた。一般的な盆、壇、磚、瓦の製造は隨處でおこなわれた。絵巻物には、壁に「本窯缸壇發客」という大きな看板を掲げた焼き物店が石湖の越城橋のたもとにある。

米穀業は16軒。米行(5軒)。「糧食」(3軒)。「口口糧食老行」、「楓斎糧食」、「照楓糧食」。「豆餅」(2軒)。「糧食油酒」、「糧食、油酒、豆餅、名酒」(問口三間)。「糧食油酒豆餅老行、公平交易」。蘇州を中心とする江南では、明代後期より区域内で生産される米穀が需要に追いつかなくなり、清代になると、穀物作付け地の比率が低下するにともない、人口の急速な増大と酒、酢、醤油などを醸造する工業用穀物の大量消費

清代蘇州都市文化繁栄の実写（范）

によって、江南の米穀供給が需要を満たせないという状況がしだいに深刻となった。蘇州はまた浙江東部から福建沿海にかけての米穀が輸送販売されるさいの中心であり、米穀不足地域にかなりの穀物を送りだしていた。これにより江南は毎年長江をつうじて長江中流・上流域の米穀を移入し、運河をつうじて華北地区の豆・麦・雑穀を移入し、海上輸送によって東北地区の豆・麦や大豆絞り滓などを移入せざるを得なくなった。移入された穀豆類は、雍正、乾隆年間には毎年2600万石以上に達した⁸⁴⁾。蘇州の穀物市場は、郊外の楓橋鎮と城内北側の齊門に集中していた。楓橋鎮は運河が通っており、明代以来、江南最大の米穀輸送中継地であり、「大量の湖広の米が蘇郡の楓橋に集まり、楓橋の米には上海、乍浦から福建に運ばれるものもある」⁸⁵⁾といわれた。康熙年間、当地の洞庭西山の米商が鎮の米牙の市場支配を脱することを意図して、鎮に会館を設立し、洞庭の米船が直接に会館にはいり、安い価格で米穀を売りだし⁸⁶⁾、競争力を強めた。乾隆末から嘉慶初年にかけて、楓橋一帯の米行は200軒あまりにもたつた。また、蘇州城中の舟は楓橋の米行の舟を標準としていたが⁸⁷⁾、これは楓橋の米市の規模と影響力の大きさのあらわれであった。江南は毎年数百万から一千万石の大豆を移入していたが、足立啓二是大豆と大豆絞り滓が清代中期には筆頭の商品になっていたと評価したのである⁸⁸⁾。江南に移入された大豆は主として油を搾るか、豆腐類に加工されたり、大豆絞り滓は水田と木棉畑の肥料となつた。海上輸送による東北地方の大豆は、太倉州の劉家港から蘇州に転送された。乾隆17年、劉家港に豆類雑穀問屋を開いていた商人のうち、山東省東部の商人が31軒、安徽と江蘇の商人が59家にたつし、ぞくぞくと蘇州に向けて豆類を送りだしていた⁸⁹⁾。『江南省蘇州府街道開店総目』の第11は「長路糧食」の源発店であった。米豆行は蘇州城中にも多く散在していた。米穀業界は乾隆年間に胥門外の水仙廟に公所を設立した⁹⁰⁾。さらに価格を統一するため、市場取り引きの決まりをつくり、毎日早朝、茶館で値決めをして交易することとし、これを茶会と呼ぶようになった。こうした茶会は、婁門、齊門方面では迎春坊にあり、葑門方面では

望汎橋にあり、閔門方面では白姆橋と鉄嶺閔にあった⁹¹⁾。徐揚の筆は楓橋にまで及んでいないが、蘇州の米穀豆類業の重要性を描きだしており、「楓斎糧食」、「照楓糧食」は穀物市場における楓橋の主導的地位を示しているのである。

絵巻物中に錢莊・質屋業は14軒ある。「当」(二階建て、間口五間)。「錢莊」(9軒)。「兌莊」。「兌換錢莊」。「兌換銀錢」(2軒)。質屋と錢莊は清代蘇州の金融市場を構成する主体であり、経済生活には欠くことのできないものだった。蘇州城中に質屋はいたるところにあった。乾隆元年、蘇州府城にある三県をつうじて290軒の質屋があったが、これが清代蘇州の質屋軒数の最高であった。徐揚が見た大きな構えの質屋は、まさしく実際の姿であった。錢莊の業務はもともと銀両と制錢の両替のみであったが、乾隆中期になると預金と貸し出し業務を兼ねるようになった。商品経済が盛り、商品流通量が日増しに拡大するにともない、蘇州の錢莊の軒数はかつてない多さとなつた。乾隆31年から41年まで、山西商人が蘇州に開いた錢莊だけでもなくとも130軒あまりあった⁹²⁾。乾隆中期、山西の錢業商人の寄付金を記した石碑が山塘の半塘橋に立っていた。『江南省蘇州府街道開店総目』の第19は源発当である。当時、徐揚は蘇州の西部に錢莊が林立する風景を目撲したはずであり、このため胥門から山塘にいくつもの錢莊の看板を描いたのである。

絵巻物中の酒場・料理屋・小喫などの飲食・食品業は31軒ある。「名酒」(6軒)。「酒店」。「酒館」。「素菜」。「餛飩」。「精潔餛飩」(2軒)。「三鮮大面」。「面館」(2軒)。「大肉饅頭」(2軒)。「包辦酒席」(2軒)、うち一軒は二階建て、間口六間)。「和合館」、「大肉饅頭」(二階建て、間口三間)。「五簋大菜」、「包辦酒席」。「童叟無欺、五簋大菜」。「葷素小喫、家常便飯」。「本号包辦各色酒席、五簋大酒」(二階建て、間口二間)、「各色小喫、家常便飯」。「茶食店心」。「上桌点心」。「各色果品」。「三元齋、状元糕」。「状元香糕、上桌饅頭」。「乳酪鯛」。「桂花露、玉露霜、状元糕、太史餅」。蘇州は経済が発達し、生活水準も高く、消費も旺盛であった。蘇州人は飲食にこだわりをもち、酒場や料理屋の名声は遠くまで響いた。沈朝初の『憶江南』の詞には「蘇州は

好し、酒肆と半朱の樓。遅日、芳樽檻畔に開かれ、月明灯火、街頭を照らし、雅坐に珍羞を列す」と詠われている。清代の蘇州の士紳には「^{りょうり}烹飪を窮める」という趣味で有名な人びとがいた。流行の及ぶところでは、遠近を問わず蘇州風が尊ばれた。虎丘に近い斟酌橋のちかくにある三山館は、清初の創業、もともとは白堤老店といった。「往来の人、虎丘にさしかかって風雨にあつたり、入城に間に合わなかつたりすれば、ここに宿泊する」のであり、料理人の腕は人びとに賞賛されていた。のちに、涼亭、暖閣を建て増しし、商売は繁盛した。虎丘山附近の住民は、婚喪宴会の事があればここでおこなうことが多く、嘉慶年間までその地にあった。引善橋のそばで営業を始めた山景園酒楼は、美酒と旨い肴が売り物であった。この二軒の酒楼は、虎丘山の麓にあり、山上の塔を借景しながら溪山の風景を作りだしており、さらに街道筋に立地していることでひろく知られ、食事宿泊と宴席の両方を提供した。絵巻物の中、桐橋にあって「包辦酒席」の看板を出している酒楼は、間口六間の二階建てであり、三間ずつL字型になった店の建物は大きくしかも瀟洒であり、前は橋の架かる運河に臨み、庭園には木々を植え、後ろは山を背負っている。これは三山館によく似ている。三山館で売られた満洲風、中国風の料理、スープ、小喫は149種類もあり、あらゆる山珍海味、煮炒烹炖、なまぐさものに精進、お祝いと法事の料理と、すべてが揃っていた。デザートは26種類あった。「料理には八盆四菜、四大八小、五菜、四葷八拆、および五簋、六菜、八菜、十六碗の取り合わせがあり」、「器には十二と十六に分かれ、‘團仙’と呼んだが、これは八仙桌の上を囲むからだ」⁹³⁾。一つの酒楼でこのように豊富な料理を出し、名物のコースもこのように多かったのであり、ここから蘇州城内の飲食業の盛況もうかがうことができようし、人びとが「蘇州人が飲食に凝るのは有名である」といい⁹⁴⁾、また「園館は蘇州のどこにでもある」といったのも肯ける⁹⁵⁾。しかし、数量の点では虎丘がもっとも多かった。絵巻物に見える「五簋」とはもともと五種の料理の意味だが、ここでは「五簋大菜」でボリュームのある高級料理の形容詞として使われている。蘇州

の小喫も天下に名高かった。小喫店、餅麵店、熟食店はあちこちにあった。乾隆『吳県志』には、吳の食べ物には時間にちなんで名づけられたもの、場所にちなんで名づけられたもの、人にちなんで名づけられたものがあった、と見えている。人にちなんだものとしては鴨料理があつた。蒋さんの名前をつけて「蒋野鴨」といった。味付きの豚足では陳さんが有名であり、「陳蹄」といった。乾隆時代のソーセージ製造業では陸稿薦の名が知られ、昔からのたれをつけて薰製にしてあり、北京でもよく食べられた。前述の酒楼や茶肆の名物料理の外に、乾隆年間に名を知られていた食べ物で場所にちなんで知られていたものとしては、安雅堂醡酪、有益齋藕粉、紫陽館茶乾、茂芳軒麵餅、方大房羊脯、温將軍廟前乳腐、野味場野鳥、鼓樓坊餽飩、南馬路橋饅頭、周啞子巷餅餃、小邾弄内釘頭糕、善耕橋鉄豆、百獅子橋瓜子、馬医科燒餅、接駕橋湯圓、干將坊消息子、虎丘蓑衣餅があり、まぜこぜの名前で知られていたものとしては、野莘薺餅餃、小棗子橄欖、曹箍桶芋艿、家堂裏花生、小青竜蜜餞、周馬鞍首烏粉などがあり、すべて著名な特産食品であった⁹⁶⁾。『江南省蘇州府街道開店総目』の第9は「精潔肉食」の美好芳館、第13は「法製精巧果品茶食」の森祿齋、第15は「葷素酒飯」の此奥館、第16は「精潔滿漢糕点」の上元館、第24は「葷素大面」の美樂館であった。采芝齋、稻香村など砂糖菓子の店は、独自に糖食公所を作っていた⁹⁷⁾。当時、蘇州の食品は品質を重視して店の評判をたもち、屋号や立地場所、季節などの特色をだしていた。『姑蘇繁華図』は蘇州の飲食業がおおいに発展した情景を如実に示している。

医薬業は13軒。「藥室」(2軒)。「藥材」。「參貝陳皮」。「川広藥材、登樓看貨」。「參藥老行、川広雲貴雜貨」。「万応膏藥、万病回春」。「川貴藥材、道地藥材、膏丹、人参、丸散」(二階建て、間口四間)。「道地藥材、丸散膏丹、内店人参、藥酒」。「兌發人參」。「内店人參、不二価」。「陳皮」。「大方脈葉」。蘇州は名医で知られており、藥屋も多かった。『江南省蘇州府街道開店総目』の第2は「揀選道地川広藥材」の保和堂であった。蘇州の藥屋には、毎年端午節に蒼術白芷を無料で配るという慣例があった。藥屋の慣例と

清代蘇州都市文化繁栄の実写（范）

して、買った煎じ薬が意にそわなければ返品交換できるが、丸薬や塗り薬は返品交換お断りであった。咸豐年間に煎じ薬の業界は、旧学前に太和公所を設立し、「采薬の道地を講求し、炮製の精良を考博する」⁹⁸⁾ことにつとめた。蘇州で製造されたさまざまな錫の瓶に入った水薬は、分野ごとに類別され、症状に応じて服用するものが40種あまりもあった⁹⁹⁾。虎丘の仰蘇樓、静月軒製造の花露¹⁰⁰⁾、乾隆年間に戈氏が楓橋鎮の鳳凰橋西詰めに裕慶堂を開いて製造した戈氏半夏は、咳や痰の専門薬であり、その名は各地に伝わった。その他歩蟾齋の膏薬、雷允上の薬材はともに膏薬の名産品であった。雷允上が開いた薬屋が雷誦芬であり、碑刻のなかに幾度も現れている。外地から運ばれてきた薬材は、主として南濠にあつまつた。いわゆる「南濠の薬材」である。薬材を経営する商人は、主として江西商人と河南商人であった。薬用人参の店はおおく閨門外大街にあり、「百貨交集の区であり、人參の商いがもっとも盛ん」であった¹⁰¹⁾。徐揚が閨門大街に描いた看板を高く掲げている間口四間二階建ての大きな薬材屋は、熱気に満ちた蘇州の薬材市場を示している。

絵巻物のタバコ屋は7軒。「名煙」（2軒）。「浦城建煙」。「大文号煙店」。「各色名煙、浦城煙行」。「名煙雜貨」。「浦城煙行」。当時、南方でタバコ栽培が早くから盛んであったのは福建と江西の両省であった。蘇州でタバコ業を営んでいたのは主として福建省、河南省、江西省、それに安徽省寧国府の商人であった。福建と河南のタバコ商は「公和煙幫」と称して、もっぱら福建、江西の箱詰めタバコを蘇州で売りだしていた。かれらは乾隆年間に閨門外の閨四団に会館を建設し、タバコ号を開設し、公和煙幫の船着き場を修築した¹⁰²⁾。福建汀州永定県の皮絲煙幫はさらに蘇州に龍岡会館を創立することを計画した¹⁰³⁾。寧国府下の涇県、太平両県のタバコ商も、乾隆年間に閨門南城下に宣州会館を設立し、その後勢力をたえず拡大した。蘇州の城内・郊外のタバコ関連業者は、胥門外に太平庵を建立し、タバコ業公所とした¹⁰⁴⁾。絵巻物中のタバコ業の看板は主としてこれらの地区に見えているのは、まぎれもなく景観の写実である。『江南省蘇州府街道開店総目』の第14は、「自製浙閩名煙」の啓

泰号であった。浦城は福建省建寧府浦城県であり、タバコの大産地であった。絵巻物中には三箇所に浦城煙の看板が見えているが、これは浦城のタバコが蘇州のタバコ市場で支配的な地位を占めていたことの表れであり、文献の記載と合致するのである。民国初年になっても蘇州には11軒のタバコ問屋があり、そのうち10軒は福建商人が経営していた¹⁰⁵⁾。

絵巻物中の南貨店は5軒。「南貨」。「南北雜貨」。「金華火腿」。「白鱈銀魚老行」（二階建て、間口三間）。「寧波淡鱈、南京板鴨、南河腌肉、膠州腌豬老行」（間口三間）。金華火腿、南京板鴨、寧波淡鱈はどれも名物であり、蘇州の市場で売られていたのは当然である。南河とは山東、江蘇の蘇北一帯を指す。蘇州市場で金華ハムを商っていたのはおそらく金華商人が中心になつて経営していたものであろう。乾隆15年、金華商人は蘇州閨門外の南濠大街に会館を建設した¹⁰⁶⁾。蘇州市場の腌臘などの商品は主として蘇北、山東、東北などから運ばれた。乾隆年間、山東の兗州と江蘇の徐州、淮安、揚州、蘇州五府の商人が胥門外に江魯公所を創設して、「およそ腌臘、魚蛋、鹹貨などの商品、花生、北貨などの商品の仲買や蘇州での販売を公議した」¹⁰⁷⁾のであり、経営者は主として蘇北と山東の商人であったことがわかる。乾隆7年、揚州府の高郵県と宝應県の商人を中心とする「蘇州の山塘にあつまつて腌臘魚貨を販売」する商人は、240人あまりにも達しており、高宝会館は閨門外の潭子里に位置していた¹⁰⁸⁾。当時閨門、胥門のあいだには腌臘の店舗が多く、商品の供給も充実していたことがわかる。蘇州の南北鋪でもっとも有名なのは孫春陽南貨鋪であった。この店は明代後期に呉趨坊北口に創業し、後に皋橋の西に移転して、清朝前半期には隆盛を保っていた。その店は「天下に名が聞こえ、店中の品物も宮廷御用達である」。店の配置はまるで州県の衙門のようであり、南北貨房、海貨房、腌臘房、醬貨房、蜜餞房と蠟燭房の六房を設け、「買うものは、出納台で錢を渡してチケットを受けとり、自分で各房にいって商品を出してもらう。管総が全体のマネジメントをし、一日ごとに小結算、一年たてば大結算をする……店の規則の厳格、商品の精選は府内ではおよぶもの

がない」¹⁰⁹⁾。このもっとも知られた南北貨店は、すくなくとも240年あまりつづき、清代の多くの有名人の注意を引いた。徐揚は蘇州人として、この店を熟知していたはずである。かれは閻門外の山塘橋のたもとに濃厚な筆づかいによって二軒の南北貨廩臘店を記録している。一軒は4幅に18個の文字を書いた看板を掲げており、一軒は間口三間二階建てである。文献と対照すると、その写実はおそろしいほどである。『江南省蘇州府街道開店総目』の第6は「火腿魚鱉行」の永吉号であった。

洋貨屋は2軒。「洋貨行」(2軒)。洋貨とは、外洋から舶載された珠璣、象犀、蘇木および西洋船が輸入した外洋の品物であった。蘇州の洋貨業は、嘉慶年間に同業者が梵門裏蕭家園に詠勤公所を創設したと言われているが、一説にはアヘン戦争以前には独立した業界団体をもたず、絨領業に附属していたともいう¹¹⁰⁾。山塘街には、海外に出かける商人が多く洋貨店を開いていた¹¹¹⁾。洋貨を經營したのは主として福建、広東の商人であった。道光10年、福建商人は三山会館のために寄付をしたが、そのうち洋幫は32店を占め、大きなグループをなしていた¹¹²⁾。

油、塩、糖、雜貨屋は17軒。「油行」(2軒)。「官塩」。「糖行」。「雜貨」。「南北雜貨」(3軒)。「雜貨老行」。「京蘇雜貨」。「蘇杭雜貨」。「蘇廣雜貨、發客不誤」。「川廣雲貴雜貨老行」。「小磨麻油」。「官鹽、雜貨」。「復興号、雜貨老行、雲貴川広各省雜貨老行」(二階建て、間口三間)。

「睿清菜油」。蘇州は全国的な集散地であり、いわゆる「凡ゆる四方得難きの貨も、一つとして無いものはない」というのがふさわしい。塩は松江から運ばれ、官が専売したので「官塩」といい、密売塩ではないことを標榜したのである。塩の舟は南濠に集まり、村や鎮に散っていった。絵巻物では木瀆鎮に官塩鋪があるのはこのためである。江南の人は甘いものを好み、砂糖の需要は大きかった。砂糖は廣東、臺灣から運ばれ、經營者には閩、粵商人が多かった。上海の人褚華は「閩粵人は二月三月ころに白砂糖を舶載して売りに来る」と記している¹¹³⁾。乾隆年間、江南市場の砂糖の三分の二は廣東から来ていた¹¹⁴⁾。江南の人は菜種油を好んだので、市中には「睿清菜油」の文字が見えている。『江南省蘇州

府街道開店総目』の第25は、「発壳青桐菜油」の恒豊号であった。

醬菜屋は5軒：「醬園」。「上用小菜」。「甜醬小菜」。「秘製小菜」。「伏醬」。蘇州の甜面醬は天下に名が聞こえていた。「四季いずれも造るが、盛夏のものが佳い」¹¹⁵⁾ので、醬店には「伏醬」の名を掲げているのである。『江南省蘇州府街道開店総目』の第20は大有号醬園であった。醬坊業界は同治年間には徽州、蘇州、寧波、紹州の四幫があり、86軒に達した。醬業公所が東城の顏家巷にあった¹¹⁶⁾。醬店は全城にあり、醬坊に醬貨を小口で卸していた。上用小菜とは、かつて皇帝がこれらの小菜を召し上がったことに因む。康熙、乾隆の南巡の帰りには当地から大量の蘇州小菜を進貢したのであった。

燃料店は3軒。「炭行」。「上江青炭」。「柴炭老行」。炭は木炭と石炭であり、蘇州の需要はすべて外からの移入にたよっていた。木炭は主として浙江、安徽と江西などから来た。「上江青炭」は、長江中流域からの木炭を指すのであろう。嘉慶元年、江西会館に寄付をした炭商人の勢力は大きかった。石炭は主として河南、山東からのものであり、寧波、紹興の商人が經營するもの多かった。清代後期には、南濠街に煤炭公所が建てられていた¹¹⁷⁾。

皮貨屋は1軒。「皮貨行、皮貨發客、皮貨行」(二階建て、間口四間)。「牛皮業は閻門に集まる」といわれる蘇州の皮鞣し業は、主として南京人が営んでいた。清初に興り、嘉慶年間には城西北隅の隆興橋に裘業允寧(あるいは允金)公所をつくり、閻門で客から牛皮を買い取り、加工して軍服や長靴、馬鞍、皮鼓、皮箱、雨靴などを作った¹¹⁸⁾。絵巻物中、閻門大街に位置する羽振りのよさそうな皮貨屋は、皮貨の卸問屋の店であろう。

麻行1軒。「麻行」。麻行は麻糸と麻繩の店である。蘇州の麻の交易量は相当なものであり、「白麻の一貨、蘇に盛行する」といわれていた。雍正12年、江西商人が万寿宮を修築するさい、白麻業者は「一担ごとに四分の割合で」寄付をし、「年間で八百両あまりの資金を集めめた」¹¹⁹⁾のであるから、年間交易額は20万担に達したことになる。

豬行1軒。「豬行」。豬行は客のために生きた

清代蘇州都市文化繁栄の実写（范）

豚を取り引きする場所であり、主として常州府の無錫の商人が開いていた。乾隆27年、山塘の蓮花斗に毗陵公墅を開き、のちにはこれが毗陵会館となつたが、一般には「豬行会館」とよばれ、「およそ各県の客が豚の取り引きのため蘇州にくると猪行に投宿して売買し、売りにだされた商品の多寡、販売の遅速をにらんで相場をきめ、客に代わって売買した」¹²⁰⁾。

果物業は2軒。「各色果品」「四時鮮果」。四時鮮果とは青果店であった。南方の青果を商うのは、おおくは福建商人、とくに福州商人であった。道光10年、万年橋大街の三山会館を改修したさい、青果幫の商人は16店をかぞえた¹²¹⁾。

楽器店は1軒。「鳳鳴斎、琵琶弦子」（一階と二階）。弦子とは三弦の俗称であり、琵琶とともに弾き語りに用いる楽器であった。琵琶弦子で楽器店を意味した。蘇州は絲竹戲曲の地であり、これら無しでは済まなかつた。康熙52年、蘇州織造の李煦が帝命によって蘇州から樂器作りの職人を選んで北京に送つことがあつた¹²²⁾。これは、一つの側面から蘇州の樂器業の発達を説明している。

扇子店は2軒。「雅扇」（2軒）。雅扇は扇子店のことであり、折扇、団扇、葵扇がそろつていた。山塘には数十家の扇屋があつたが、その芭蕉扇の葉は、顧祿によると「多くは粵東の客から買い入れた」のである。広東省の新会県は葵葉の産地であり、新会商人はそれを蘇州に運びこみ、山塘橋の東に岡州会館を建てていたが、一般には「扇子会館」と呼ばれていた。折扇の製造は蘇州に代々名手が輩出した。団扇には絹あり、羅あり、「淡描であつたり濃繪であつたり、多くは他省および居民の新婚夫婦が夏を過ごすのに使われた」。扇の柄は影漆（技法は日本の鎌倉彫に近い）や紫緑色に書画を彫りこみ、なかに金泥をはめ込んだものが尊ばれ、顧震涛がいうその名によって有名な王素川刻扇とは、扇の柄の雕刻を指すのである。これらの扇子店が、山塘だけでも數十軒はあり、東西ふたつの山廟に会合して価格をさだめた¹²³⁾。『江南省蘇州府街道開店總目』第18は「精造進呈宮扇」の卿雲館であった。

船行は3軒。「船行」（2軒）。「航行」（間口二間）。船行は客のために商品を輸送し、旅客を運

ぶサービス業であった。商品はかならず官府に届け出た信用ある船行に引きうけさせれば安心であった。乾隆中期の人呉中孚の『商賈便覽』には「船を雇うには近隣の知り合いでなければ駄目である。かならず船行から一筆いれさせると、途中の吉凶も安心である。まま悪人がわるさを図つても、足がついているので盗みはやらない。かりに牙行をとおさず自分で船を雇うと、一見さんであるのをよいことにひと咬みしてやろうということになる。落とし穴もあるので、よくよく慎重にやるべきである」と書かれている¹²⁴⁾。船行船戸は外地からの商人や荷主から委託をうけると、貨物を数えて、委託人と運送契約をむすび、運賃の全額あるいは一部を受けとて、貨物を指定の地点や受取人のところまで運ぶ。『商賈便覽』には運輸についての手紙の例文が載せられている。「飛翰ならびに銀いくらを受領しました。お達しの買い入れの件はリストどおりに取り急ぎ買いそろえ、すべて精選の好貨をそれぞれ問屋より梱包させ、ここに某人、某船に引き渡しそみやかに輸送させました。ご査収のほどをおねがいします。運賃、船代はすでにいくらを支払いすみですので、荷物の引き渡し後にいくらをご清算おねがいします。敬具」¹²⁵⁾。蘇州のように重要な経済都市では、船行のはたらきは突出していた。康熙38年、徽州府婺源の生員詹元相が南京に行って鄉試を受験し、蘇州では買い物をして虎丘を見物し、虎丘から船で先を急いだ。三年後にふたたび受験し、また蘇州で銀1両3分を払って、「船を丹陽に行かせた」¹²⁶⁾。徐揚が描いた三軒の船行のうち二軒は貨物の集散地である棗市街にあり、もう一軒は閻門にあるのは、現実の反映であった。

絵巻物中の茶店は6軒。「茶室」（4軒）。「太平茶室」「松蘿茶室」。松蘿とは安徽省の松蘿茶である。茶店は人びとが休憩し、情報を交換し、商売の相談をする場所であった。沈朝初の『憶江南』詞にいうところの「蘇州好し、茶社はもつとも清幽。陽羨の時壺、綠雪を烹、松江の眉餅、雞油にて炙り、花草は街頭に満つ」であり、康熙末年崑山の章法の『竹枝詞・艷蘇州』にいうところの「十家に三茶室を点綴し、一里に数酒樓を參差える」¹²⁷⁾は、ともに蘇州では茶室がどこにでもあったことの写実である。乾隆年間、

虎丘では「山の端一帯、いたるところ茶店のテラス」であった¹²⁸⁾。さらに多くは「高層の建物や堂々たる建物を築き、書画を展示販売して旅客遊人をむかえた」¹²⁹⁾。こうした風景優美な茶店は賑やかな市中の茶肆とはちがって、主として旅客遊人を相手とし、運河沿いに建てられたり、山のきわに建てられたりし、客は茶を楽しみながら書画を鑑賞し風景をながめ、納涼しながら山水を愛でた。また、当時の茶室は女の子がいて客を引きサービスをした。章法の『竹枝詞・艶蘇州』には「珠明寺畔、家排を着け、漆水は鮮明、字もまた佳し。底事、顧盼を邀うこと能わざらんも、肆館の活招牌に如かず」¹³⁰⁾。宣伝文句と美人は、顧客をひきよせる有効な手段であった。徐揚の絵巻物中の茶室は、閨門、胥門の賑やかな茶肆もあり、名勝の地の洒落た茶席も多くある。

風呂屋 1軒。「香水浴堂」。香水浴堂は明代以来公衆浴場の雅称であった。明人郎瑛の『七修類稿』には、蘇州の公衆浴場は「混堂といい、その入り口には‘香水’を標榜する」¹³¹⁾とある。こうした「香水浴堂」は、清代になるとサービス対象によって、価格も異なっており、三種類あった。一つは石積みで浴槽をつくり、屋根を丸く積みあげ、浴槽の後ろには巨大な釜があつて池のようになっている。ここに輶轎で水を引きこみ、側壁には横穴をあけて水を蓄える。もっぱら釜の火を焚く係りを置き、浴槽と釜の水を通させてだんだんと温めるようになっている。この種の浴場は饅頭屋根の混堂とよばれ、もっとも大衆的で料金も安く、浴槽全体を貸し切って多数の人間を入れさせても銀一錢で足りる。しばしば行商人や屠殺人が使う風呂であった。もう一つは、白石で浴槽をつくって屋根をかけ、清泉を標榜するものであり、一般の市民が使う風呂であった。三つ目は木板で囲って盥が置いてある個室が通路の両側に並び、地面を穿って溝を通し、壁の外で火を焚くとこの溝に熱気が回るようになっている。ゆったりとした帳がかかっていて、料金もやや高く、一人あたり七分である。しかし、たとえ朝夕の寒さ厳しい時でもほかほかと暖かい。身分がある人や裕福な人が入浴する場所であった。蘇州には混堂巷という名の通りがあるが、蘇州では混堂があちこち

にあったことを窺わせる。

花木業は2軒。「四時盆景」「各色花草、四時盆景」。地方の文献には「虎丘の職人は松や梅、季節の花、めでたい花を上手に盃盆に植え付け、机上の飾りにする。嘉定の職人は白石で長さ三、四尺の盆をつくり、宣州石や英石をつみあげて小さな丘に見立て、高さ二、三寸の樹を植える。濃い色の地に疎密さまざまの林をかたどって、宋人元人の絵画の風致をつくりだし、これを見ると絵巻物を横にひろげたようである」¹³²⁾とある。草花や盆栽は、虎丘山塘の人びとがもっとも得意とするところであった。沈朝初の『憶江南』詞には「蘇州好し、小樹の山塘に種えるは。半寸の青松、虯幹古び、一拳の文古、蘚苔蒼し」とある。顧祿がいうには、花樹店は「桐橋より西に、十数軒ほどある。どれも数畝の園圃で花を栽培しており、これを園場といった」。草花を栽培するひとは「花園子」とよばれ、花をつけ、枝を寄せ、剪定し、挿し枝接ぎ木をする技能をもち、「なかには白石の長方形の盆に碎いた浙石を敷きつめ、灰を油でこねて小山の形にして、その上に草花を植えてミニチュアにするものもある」。草花の種類は多く、盆栽には短松、矮柏、冬青などをあしらい、みな枝や根が絡みあい、古色蒼然としたものが尊ばれ、花卉には梅、杏、李、桃、草蘭、玉蘭、海棠、牡丹など百種類ほど、草木には翠雲草、醒頭草、階沿草、吉祥草、怕羞草など、樹木には鉄樹、棕櫚、芭蕉、仙人掌、寿星竹、白竹、方竹、紫竹など、実を結ぶものには天竹、仏手、香橼、葡萄、柑橘など20種あまりがあった。これらの花草は、「虎丘の山や府西部の支硎、光福、洞庭などの山々で作られるものがおおむね半ばを占める。南方から運ばれたものは、北方からの客に売り、北の省から運ばれたものは、南方人に売る。ただし、かならず虎丘の花栽培農家が手を入れたのちに梱包して運ばれる」¹³³⁾。また、「花卉を栽培するのはおおむね洞庭山と光福郷の人であり、花が見頃になると山塘の花屋に売りこむ」¹³⁴⁾とも云われていた。蘇州の山塘虎丘の花市がすでに江南最大の花木市場であったことがわかる。当地で産するものも少なくないが、遠近各地で産するものもここに集中し、さらに細やかに手入れをされると高級品となり、売値も高くなつた。乾

清代蘇州都市文化繁榮の実写（范）

隆年間、花商人は山塘街の下塘に花商公所を設立した¹³⁵⁾。徐揚は山塘虎丘の色とりどりの花市に向かいあい、半塘橋のたもと虎丘とにそれぞれ間口三間の四時盆景や草花を売る店を描き、店中にさまざまな盆栽や咲きほこる鮮花を置いたのである。

絵巻物中の旅館は3軒。「客寓」（2軒）。「棧房」。三軒の旅館はすべて胥門附近にある。そこには姑蘇駅があり、商人や旅人が南北を往来するさいにかならず経由する場所であったことを如実に写し取っている。

その他の業種は11軒。「天元号」「刻字処」。「写刻匾対」。「臘脂宮粉」。「灯草老行」。「神相」（2軒）。「命館」。「命相遇神、六壬神数、搜精口口」（一階と二階）。「測字」。「太平醸壇、福國祐民」。穆大展刻字や譚松坡鑄石はともに有名であった。臘脂宮粉は化粧品である。灯草は明かりとりにも使うし、占いやご灯明にも使われた。江南人は鬼神を信じており、これらの店舗もおおいに商売になった。占いコーナーの多さから、当時の人びとの心理状態を窺うことができる。蘇州人として徐揚は当然にその地の人びとの習性を熟知しており、この種の歴史のながい現象を彼の絵巻物に描き漏らすこととはなかった。

絵巻物には材木問屋などの店舗は描かれていない。しかし、胥門外の渡しの場所には、二組の大木の筏をなんとかして通そうという場面が描かれており、西岸にはすでに幾組かの小型の筏が寄せられて、二人の人物が束ねた竹竿を運びだそうとしている。蘇州を中心とする江南は木材の欠乏が深刻であり、毎年、安徽省南部や長江の上流中流の広大な地域から大量の木材を移入していた。蘇州に到達した木材はおもに齊門の東匯と西匯、楓橋に停泊し、木材を交易する材木問屋もそこに集中していた。いわゆる「東西匯の筏は、雲のようにつらなり、湖のよう広がる」¹³⁶⁾であった。乾隆3年、蘇州には徽州商人を中心として材木商が94軒、材木仲買人が5人いた¹³⁷⁾。当時の材木商店の多さをみることができる。

上に述べたところをまとめれば、清代前半期の蘇州は、全国ないし外洋の貨物が雲集する数少ない商品センターの一つであり、中国中に名を知られた絲綢生産、加工と販売のセンターで

あり、全国最大かつもっとも集中した棉布加工と卸売りのセンターであり、江南地区で最大の穀類消費と集散のセンターであり、全国でも数少ない金融流通のセンターであり、出版センターであり、ひじょうに発展した金銀装飾品、銅鉄器具および玉器漆器の加工センターであり、最先端のモードと流行を作りだす服飾鞋帽のセンターであり、中国でも独特の味をもった美味美食と飲食のセンターであり、施設が完備し、サービスのゆきとどいた生活のセンターであり、交通の便に恵まれた運輸センターであった。徐揚は写実の技法によって、『姑蘇繁華図』の中に当時の蘇州にあって実際に存在した260軒あまりの店舗の看板を記録し、蘇州という当時全国でもっとも著名な都会であり、産業センターであった繁榮の都市景観を、全面的かつ直観的に表現し、後の時代の人にとってまことに得難い文章によらない写実記録を遺してくれたのである。「公平な交易」、「子供も年寄りも騙さない」といった商業道德をうたった看板からは、当時の蘇州の市場では欺詐行為が日常的におこなわれていたことが見てとれ、康熙『蘇州府志』に「市井には機巧が多く、偽物つくりがうまい。初めて取り引きをする相手には試験として外面はよいが本物ではないものを出す。ちゃんと弁別できれば、そこではじめて良い品を取りだす。値段も数十倍もかけはなれている」¹³⁸⁾とある言葉を思い起こさせる。「二価はない」という文字は、けっして値引き交渉はしないことを強調すると同時に、物は確かに値段も相応だということを標榜している。一つの都市の繁榮を写しだすのに、260軒あまりの店舗の宣伝文句を写し採ったのは、明清時代の同類の作品でも唯一のものである。また、大きな意義をもつのは、これらの宣伝文句が反映する内容には、すべて対応する文献の記載があって、だいたいは一つ一つ確認できることである。清代前半期の蘇州の様相を示すものとしては、汗牛充棟もただならぬ文献があるほかに、さらに『姑蘇繁華図』というこの写実藝術の宝物があるのだ。

二

『姑蘇繁華図』は清朝盛期の蘇州の工商業と市場の繁盛ぶりを示すと同時に、当時の蘇州の社会文化の各方面をいきいきと写しだしている。試みにそのいくつかの典型について略述してみよう。

(一) 科挙教育文化

「大魁（首席合格）の天下の公器たるを識らずして、ついに巍科ごうかくを視てすなわち我家の故物となす」¹³⁹⁾。明清時代を通じて、蘇州人は科挙試験に長じた受験の名手であり、合格者の人数、比率の高さ、上位合格者の数は他に敵うものがなかった。清代、全国の状元（首席合格者）の四分の一以上が蘇州府の出身者であった。状元の多さについては、康熙年間の蘇州人汪琬が翰林院にいたとき、蘇州の状元を当地の「特産品」と誇って、蘇州には特産品が少ないと云つて貶した同僚を咄然とさせたほどだった¹⁴⁰⁾。康熙末年の江蘇布政使楊朝麟もこう賛嘆した。「本朝の科挙合格は、江南がもっとも盛んであるが、蘇州府はもっとも鼎甲（首席、次席、第三席）を輩出し、高位高官の人物と文物が、華麗を競いあうこと、海内隨一と称えられる」¹⁴¹⁾。徐揚が作画した乾隆の前半20年間は、蘇州の科挙試験合格者数がもっとも多い時期だった¹⁴²⁾。蘇州が人文の淵藪となつたのは、強い経済力も与つて力があつたが、さらに大きかつたのは塾学、県学、府学、書院における教育の発達であり、学問を大事にし、教育と受験を重視する社会の良風良俗と義学など社会に開かれた学校を運営する慈善行為、家庭教育、先生生徒の聯係、環境による薰陶の影響であった。これらのすべてが、科挙試験における赫赫たる地位を蘇州人に得させたのであった。『姑蘇繁華図』にも蘇州人の勉強ぶりと受験について多くの場面が描かれている。

靈巖村の手前に一軒の書塾があり、一人の先生がちょうど一人の生徒を試験しているようであり、ほかに二人の生徒が書物を覗いていた。小さな村塾の真に迫った風景は感動をあたえる。これは徐揚の自跋がいう「万巻の書香、或いは

先生の授業の席につらなる」という情景である。

靈巖山枯嶺の西には、一棟の書楼が竹林のあいだに位置しており、ひとりの長者が揮毫の最中であり、もう一人が瞑想にふけっている。蘇州の多くの文人は、このような安静な環境のなかで受験前の勉強をしたのである。のちに触れる遂初園を作った吳銓は、自分の「璜川書屋」で子供たちに勉強を教え、のちには孫の泰来がついに優秀な成績で進士に合格したのであった。

山塘橋の西のたもとに義学がひとつ見える。小門の上には「義学」の二字が書かれている。三間の書屋のなかで、塾師がちょうど九人の子供の勉強を指導しており、うち一人は罰を受けて跪かされており、一人は先生の講釈に聞き入り、それ以外の七人は二間の書屋のなかで読書討論している。義学は一族のなかで勉強をつづける経済力のない貧乏な子弟のために設けられたものであり、北宋時代の范仲淹が創立した范氏義荘の義学がもっとも早い。清代前半期、蘇州の義荘は増加しはじめ、多くは義学を附設して族人に勉学の機会を提供した。工部郎中蔣文滂は、半塘の彩雲橋に義塾を設置し、一族中の貧窮した子弟を教育した¹⁴³⁾。清代中期、清節堂など慈善組織も義学を設置していた。

蘇州は人文の淵藪であり、府学、県学の建物は広く堂々としており、生員の数も多く、鄉試、会試の主力であった。生員になる以前、童生は住んでいる県、府の試験を受けねばならなかつた。これが県試と府試である。『姑蘇繁華図』は蘇州知府衙門で挙行されている府試の場面を描いている。おそらく受験生が多すぎるためか、あるいは試験監督を厳格にするためか、他の地方のように府学でおこなわれるのではなく、府の衙門で挙行されている。衙門内には飾りつけがされ、受験生は両翼の建物に設けられた試験場内に詰めこまれて、ちょうど試験中であるように見える。大門と儀門は重々しく閉じられ、それぞれ官員がきびしく看守しており、厳肅な雰囲気がただよっている。監督の下役たちは試験責任者である官僚の指図を聴いている最中のようである¹⁴⁴⁾。これこそ、徐揚が図跋のなかでいうところの「三本の蠟燭の火、あるいは童子の試験場で選抜をする」情景である。かくも荘

重かつ宏大的府試会場の描写は、おそらく他には得られないであろう。府衙の大門の前には、紅色の地に黒字の「天開文運」の額が臨時に掲げられて目にも鮮やかである。衙門の前には係りの人役や見物人でごった返している。衙門前の横の通りには、両側に牌楼があり、右手のものは「吳中天府」、左手のものは「春申旧跡」とあり、蘇州の厚い文化の蓄積を示している。衙門の西には商店がならび、北側に「三元齋」という菓子屋があり、大きな「状元糕」の紅色の看板を掲げている。北側には文具店があり、やはり大きな「状元考具」、「三場名筆」、「試巻」などの宣伝文句を出している。こうした縁起の良い宣伝文句は、受験生の一心に良い成績を収めたいという心理に合わせたものである。こうしたものすべては、胥門の城牆のはるか向こうに見える蘇州府学、木瀆鎮の花嫁を迎える行列のなかに「翰林院」、「状元及第」と書かれた道具などとともに、蘇州の濃厚な科挙文化の息吹を作りだしており、おのずと蘇州文化の盛況と受験を重視する全社会的な雰囲気との関係づけをさせるのである。

（二）演劇と音楽文化

蘇州はまた著名な戯曲の中心でもあった。沈朝初の『憶江南』詞が「蘇州好し、戯曲は宮商に協う」というところである。章法『竹枝詞・艷蘇州』には「家で歌い戸で唱うのは尋常の事、三歳の孩童も戯文を識る」とある。『竹枝詞・說蘇州』には「敷粉と煙薰に拘わらず、七八年頭にて戯文を学ぶ」¹⁴⁵⁾とある。清代中期、吳江県の黃匏子『続咄蘇州』はさらにいう。「男児が生まれ容貌が良ければ、歌曲を学んで人の歓心をかうようにさせる。男の身でありながら女の身のふりをさせ、夜な夜なお役人様の夜とぎをさせる」¹⁴⁶⁾。吳の人はもともとよく謳う才能があり、水郷の風光を歌詞にあらわすのに長けていた。古樂府には『吳趨行』という歌があり、「吳の音楽は清婉であり、長江の広い流れのよう、綿綿として徐ろに遊れ、國士の風がある」¹⁴⁷⁾と唐初の人はいった。明代後期に「魏良輔が新しい曲調を創り、梁伯龍が艶っぽい詞を作つて」から、蘇州を中心とする江南では、「もう古い調べなど演奏せず、競つて新しい音楽を作り、樂器

と肉声をまじえ、音色は絲や髪のように纖細」¹⁴⁸⁾になった。これ以後、崑曲は全国に流行し、南崑、北崑の二大分派を形成し、さらには「四方の歌う者はかならず呉門を宗とする」という局面が出来たのである¹⁴⁹⁾。康熙年間、一説には蘇州の地には劇団が数千もあり、なかでも寒香、凝碧、妙觀、雅存の四大劇団がもっとも有名であった。梨園の子弟は文人汪琬が誇った二種類の蘇州「特產品」の一つであった。雍正、乾隆年間、蘇州の「城内城外にはあちらこちらに芝居小屋があり」、芝居の上演は「昼夜絶えることがなかった」¹⁵⁰⁾。乾隆中後期には、蘇州には全国十いくつの省から来た70あまりの劇団が集まっていた¹⁵¹⁾。一説によると、蘇州にはもともと芝居小屋はなく、民間で奉納や接客のために芝居をやらせるさいには、俳優は虎丘山塘河に浮かぶ卷梢船のうえで演じ、観衆は周りの沙飛船や牛舌小船に座って芝居見物をしたという。水上で観劇すると船が転覆する危険もあり、雍正年間に屋内の舞台をつくって芝居小屋としてからそれを模倣するものがあい続き、まもなく芝居小屋が30軒あまりにも達したという¹⁵²⁾。こうした芝居の上演は水上に揺れる卷梢船から上陸して、固定した広大な芝居小屋に移ったのであった。これらの芝居小屋は、商家や会館が客を接待するために造られたため、繁華街である金闇亭、闇門一帯に分布していた。乾隆から嘉慶にかけて、「蘇州の芝居小屋は十数カ所をくだらず、附近の人が宴会をひらくには芝居小屋をつかつた。接客の便をはかるため、豚や鶏をつぶして料理を出し、主客で満席となり」¹⁵³⁾、人びとは「蘇州は商賈が雲集し、宴会は止むときがない。芝居小屋は数十箇所もあり、連日芝居を打っている」¹⁵⁴⁾といった。徐揚が生きた時代は、まさしく蘇州の戯曲がもっとも隆盛していた時にあたり、『姑蘇繁華図』が記録する金闇亭、闇門一帯は、ちょうど芝居小屋がもっとも集中していた場所であった。このため、絵巻物の中には芝居の場面が多く描かれている。

絵巻物を開いて木瀆鎮にさしかかったばかりのところ、斜橋のたもと運河に面した大広間のなかで、二人が向かいあって座り、そのうち一人は三弦をつま弾いており、もう一人が伴奏している。手に持つ樂器は琵琶のようであるが、

これは有名な蘇州の三弦・琵琶の弾き語りである。これは民衆が自分で音楽をたのしむ形式であった。康熙皇帝は三弦弾き語りにつよい興味を示し、人をやって八十数歳になる南府の教習朱四美に尋ねさせた。「琵琶にはいくつの調子があるのか。調子の名前はどこからつけられたのか。大石調、小石調、般涉調などの名前はしっておるか。さらに沈隨、黃鸝などの調子についても、すべて尋ねてはっきりさせ、朱四美的返答ではっきりしたものは一つ一つ書きしるしてこい」¹⁵⁵⁾。康熙帝、乾隆帝の祖父と孫の二人はそれぞれ六回ずつ南巡し、蘇州では毎回のように宴席で芝居を打たせた。康熙44年の第五回南巡のおりには、蘇州に六日間滞在し、蘇州織造李煦は毎日宴会と芝居を用意した。李煦は「女の子を何人か搜ってきて、御前で芝居をやらせて、皇上にひと笑いしてもらおう」¹⁵⁶⁾とさえしたのであった。さきに述べたように、江南織造はさらに樂器製造の名手を選んで北京に送った。乾隆時代、蘇州の弾き語りの藝術はすでに成熟しており、著名な弾き語り藝人の王周士は御前に召されて演じたことがある。徐揚が描いた三弦弾き語りの場面は、現実とびたりと合致していた。

後述する木瀆鎮の遂初園には、堂会の場面が描かれている。軒廊にはぐるりと座席がしつらえられ、身分の高い友人たちが座っており、ちょうど堂会のプログラムが上演されるところである。前軒には絨緞をしきつめて舞台のようにし、台上では青衣と童子の二人が演じている。芝居の場面はどうやら南劇の四大名劇のひとつである劉劇『白兔記』のようだ。絵巻物では、すでに咬臍郎が獵にてて白兔を追いかけて母とであろう一幕まで進んでいる。地面にすわって涙を流しているのは李三娘であり、肩に木桶を担いでいるのは母に代わって水を運ぶ咬臍郎である¹⁵⁷⁾。こうした筋書きの芝居は、江南の人たちは何度観てもあきることがない。懷胥橋のたもとに、金持ちの家が俳優を呼んで樓臺で藝を披露させている情景が描かれている。樓臺の正中には紅色の毛氈が敷かれ、一人の女子がその上で舞いながら歌っている。動作は軽やかであり、容姿あでやかである。かたわらには樂師が二人いて、一人は琵琶で、一人は管笛で伴奏をして

いる。広間には二人が居すまい正しく座ってやや前かがみになっているのが客と主人であろう。そのかたわらには侍者が二人いて給仕をしており、鄰家の嫁入り前の娘も簾をかけて聞き入っている。当時、すでに多くの芝居小屋があつたが、経済的に餘裕のある家では劇団を呼んで家中で堂会をやらせ、のんびりと楽しむことが喜ばれたのである。璜川の吳氏のように全盛をほこった書香の家柄では、堂会を挙行するのがもっとも当世風の雅び事だった。徐揚のこの絵巻物はまさしく当時の蘇州の文人娛樂活動を活写したものである。

絵巻物には、獅山の端で春臺の村芝居をやっている場面もある。「恭謝皇恩」の旗幟を高くかげ、運河に面したところに飾りたてた戯臺を組み、ちょうど村芝居を上演している。戯臺の上には役者が三人いて、黒衣の男優は手に小さな銅鑼をもち、女優は腰に花鼓を結びつけ、公子然とした者が進みてからかおうとしているところである。これはおそらく明代の物語『紅梅記』のなかの『打花鼓』のエピソードであろう。これは乾隆時代には有名な芝居であった。戯臺の後部には三人の樂手がひかえているが、これは俗に「場面」と称される。その側には一皿のおやつを戯臺のうえにとどけようとする人がいる。これは、厄よけ福まねきの縁起物のようである。臺下の觀衆は頭を寄せあっており、数百人はいるであろう。その周りにはさらに田間の小道や小船を漕いで駆けつけた人がおり、杖をついた老人もいるし、大人に附いてきた子供もいる。さらに天秤棒をかついで商売にやつてきた行商人もいる。臺前はすでにぎっしり満員で、遅れてやってきた人たちは長いすのうえに立って首をのばして觀るしかない。木に登っているものや、船艤の屋根に立っているものもある。戯臺の左手の棧敷では、女の子が立って芝居を觀いている。觀るものたちはみな一心不乱に觀ており、芝居通は人に解釈をしてやっているようである¹⁵⁸⁾。春臺の村芝居は、大衆的な娛樂活動の重要な様式であった。顧祿は「二、三月には、村の顔役や市場の侠客が、野原に臺をしつらえ、錢をあつめて芝居を打たせる。男も女も見物し、これを春臺戯といい、豊作の祈願とするのである」と記している。蔡雲の『吳歛』

には「宝炬のもと千家ありて風寒からず、香塵十里にして雨還た干く。落灯して便ち演ず、春臺の戯、又に閑人を引きて野外に看さしむ」¹⁵⁹⁾とある。絵巻物中の戯臺の左手にある桟敷の女子席は、まさに章法の『竹枝詞・説蘇州』の描写と合致している。「臺戯の傍辺に小臺を搭て高低はさまざま。大小もさまざま、遠近もさまざま、上には日差しそよけがあり、周りには掘むところがない。家家先ず女人を送り来る。いまだ開場せざるには人が看るのを候ち、還りぎわに臨んでは逐隊回るを見る。日も半ばにして神魂消蕩し、この頃には悠然として見送るだけ」¹⁶⁰⁾。徐揚という内廷画院の絵師は、士大夫の堂会を描くだけでなく、大衆的娯楽の熱気を写し取ることもしたのである。

喧騒の場所である閨門の張りだしの南側に、徐揚は江湖の大道藝の場面を描いている。城壁の下、一人の女性が手に長い竹竿を持って走縄索を見せようとしている。南碼頭全体が見物の人びとで満杯になっており、商店の店員たちも二階から窓を開けて見物している。蘇州というこの富庶繁華の地には、四方から流れてきて稼ごうという江湖の大道藝人が一年中絶えることがなかった。猿回しや獅子舞、刺股回しや火焔飲み、小曲蓮湘、十錦戯法など、なんでもござれだった¹⁶¹⁾。乾隆時代の人、顧公燮は「吾が蘇州について論じれば、洋貨、皮貨、衣飾、金玉、珠宝、參葉の諸店舗、戯園、遊船、酒肆、茶座など山のごとく、林のごとく、何千人何万人いるか判りもしない。千人、万人の贅沢があれば、千人、万人の商売がなり立つ」¹⁶²⁾といった。乾隆『呉県志』も「さいわいにも豪奢の家が使ったり、雇ったりし、金錢をなげうって宴樂遊冶の費を惜しまないので、さまざまの技能者も役に立って金を儲けることができ、たとえ遊民でもそのおこぼれに与って、命をつなぐことができる」¹⁶³⁾といった。絵巻物に現れる江湖の大道藝の場面は、まさしく「遊民でもそのおこぼれに与っている」ことの生き生きとした活写である。わずかに一枚の絵巻物ではあるが、徐揚は典型的な場面をえらび、絵筆のおよぶところは、蘇州の戯曲文化中の高雅な堂会、三弦・琵琶、春臺村芝居から街頭の雑技にいたるそれぞれの次元に兼ねおよび、絵巻物の様式で全面的かつ

また具体的に清代中期蘇州の戯曲文化繁栄の状況を示しているのである¹⁶⁴⁾。

(三) 婚礼習俗文化

康熙『蘇州府志』は、当地の婚礼習俗について「婚礼は媒妁人を仲立ちにしておこなわれ、まず采納をおこなってこれを「拜門」といい、その後に納征をおこなってこれを「行聘」といい、「日ごとに催妝がある」といわれることがある。……呉県の西郷では新婦を迎えるのに小鑼を鳴らして引導する。新婦が実家から出るときには、踏轍跨鞍の儀式をおこない、百子花轡をつくり、角隠してこれを囲む。新郎の家では酒二樽に雞と豚を贈り、これを「合蹄雞」といい、「雞鳴酒」の礼という。ぽんぱりに音楽が鳴るなか花轎を導いて門を入ると、迎竜、牽彩、傅席、坐床、合巹、掠鬢の礼目がある。新婦の弟で十数歳のものが配偶を選ぶのを「保嫁」といい、宴席を設けてもてなすのを「卯筵」という。新婦は三日目の朝に廟見し、七日目に顔見せをして、礼物をもって舅・姑に会い、一月たてば里帰りをする」¹⁶⁵⁾と記している。媒妁人をつうじて婚約をしたのち、新郎側は新婦側に彩礼、聘礼および新年や節季の礼を贈るので、当地の人は「日ごとに催妝がある」といったのである。これが、新郎新婦の双方が庚帖を送って婚約し、新婚後に新婦が里帰りをするまでの全過程である。

『姑蘇繁華図』には二箇所の婚礼場面がある。一つは木瀆鎮の中心である。運河のなかの飾り付けた大船の船首に、四人かきの花轎がおかげ、轎の前には道案内一人がおり、轎のかたわらには紅色の絹織物をはおった花轎かきの人夫が立っている。船艤のなかには二人が外を眺めている。大船の右前方には小船が一艘あり、11人からなる音楽隊が乗っている。立ったり、座ったり、喇叭吹き、笙管吹き、鑼たたき、鼓打ちが賑やかにやっている。大船の前方の小船には、「翰林院」、「状元及第」の文字が書かれたぽんぱりを下げた男女で満員である。婚礼の船隊は賑やかな木瀆の市場をゆっくりと通過しようとしている。両岸および道沿いの店や住居の人びとはこの婚礼の船隊を眺めながら議論をしている。指摘すべきことが一つある。この婚礼の場

面について、蘇州市地方志編纂委員会の張英霖、姚世英両氏作の図版解説に「先導する船に載っている「翰林院」、「狀元及第」などの文字が書かれた大きなぼんぼりからすると、狀元を出したお屋敷が花嫁を迎える船のようである。秉琨の『清・徐揚《姑蘇繁華図》紹介与欣賞』も「木瀆鎮と狀元船」を見出にして、「これはおそらく狀元になって翰林院の職を授けられて故郷に錦を飾った官の河遊びの船か、あるいは新婦を迎える船であろう」と述べている。実際には、当時民間での婚礼には、翰林院や官衙の名称を借りて、見栄をはるのが慣例であった。康熙末年、崑山県の人である章法は『竹枝詞・艷蘇州』のその七に、この面白い習俗を記録している。「平民の婦を娶る轎は非凡 縵子幔帳に刺繡をして、戯文や故事を精巧に描くだけでなく、五色の綾絹、紗羅、綢緞で巧みに十二の宮人を飾りたてる。りっぱな構えの樓閣には、花灯を下げ、四人かきの轎、八人かきの轎もしばしば見受けられる。四匹の紅羅、僕らの衫と作し自家の僕でなければ親戚の使用人、それもなければ人を雇ってもよい。しかし、かならず朝靴を履かせ金花で飾り、四人が花轎の前に並ぶ。百対の花灯 灯頭の役目をする者があり、家に備えている華麗な宮灯、奇抜な形の紅灯、それにおのの郷宦や官衙の対灯、打灯。事があって一声かければ人間も灯も集まる。紅や黒の帽 衙門から借りることができ、どこでも送ってくれる。酒飯の供応と御祝儀が貰えるからである。衣帽を貰借して自分の方で着付けたり、社や会の組織に使わせて貰ったりすることもできる。かならず棍棒と鞭で先払いをし、曲がり角にくると「エイヤ」と声をだす。門までくると爆竹をならすのは常のこと。高く掲げた掌扇に翰林衡とあり紅色の紙に「翰林院」の三文字を書いて貼りつける。今日では、運送屋が「肅靜」「回避」の金字牌、金鼓、旗、銀瓜などの道具をすべて揃えていると聞く。これらの記載は、まったく上述の新婦を迎える儀仗の注釈となっている。章法はさらに一つの軼聞を筆にこしている。「昔、蘇州の周ト二が維揚に住んでいた。維揚の人卒が尋ねるには「どうしてお前たち蘇州の庶民は嫁さんをもらわないのだ」と。周が答えるに「もうとも」と。人はいった。「おれが以前蘇州に

住んでいたとき、新婦を迎えるのに、みな翰林院の傘と掌扇だったぞ」。そこでト二は弁の立つ男だったが、これには黙り込んでしまった¹⁶⁶⁾。士大夫、庶民にかかわりなく、どの家も新婦を迎えるのにはみな「翰林院」の文字をつかって場面を飾り、子孫が科挙に合格して出世する願いをこめたということが判る。徐揚の『姑蘇繁華図』は文献の記載に加えて、当時の民間における婚礼の実景を見させてくれるのである。

もう一箇所の場面は、黄鸝坊橋弄である。夫家はすでに新婦を迎え入れている。大きな紅灯籠がたかだかと掲げられ、深紅のとおりが廻らされている、紅綢の如意結びが風に漂い、親戚友人、大人子供があちこちに見え、新婚一家のめでたさが溢れている。花轎は中庭に止まっており、嫁入り道具が門外に一文字に並び、まさにぞくぞくと運びこまれようとしている。鼓樂の鳴るなか、室内では婚礼が執りおこなわれている。新婦の父母が堂上に坐り、年配の司会役が「よーし」と声をかけるなか、すでに父母にたいして二度拝す儀式には進んでいる。真っ赤な座布団の上で新郎はすでに跪き、新婦は身をかがめて前に進み、舅・姑にたいし跪拝しようとしている。門外ではお祝いの親戚友人がぞくぞくとやってくる。これは徐揚が図跋のなかで云うところの「嫁娶する朱と陳、時に及んで礼を成す」の具体的な表現である。

『姑蘇繁華図』中のこの二箇所の婚礼の情景は、18世紀中葉の蘇州民間の婚礼儀式を生き生きと如実に再現している。これはこの時代唯一の婚礼の画像であり、珍重するに足るものである。

(四) 庭園勝景文化

蘇州は市場商店において勝るが、庭園においても勝っていた。沈朝初の『憶江南』詞にいう。「蘇州は好し、城の裏、半ばは園亭。幾片の太湖〔石〕を堆積し、一窓の新漲、沙汀に接ぎり、山水は自ずと清靈たり」。蘇州は明代中期、後期にかけて庭園建設のブームが起こったのち、清代前期にはふたたび高潮を迎えていた。徐揚が見たのは、ちょうど蘇州の庭園の全盛時期であった。このため『姑蘇繁華図』中には蘇州の多くの庭園勝景が描かれている。

清代蘇州都市文化繁榮の実写（范）

絵巻物のなかでもっとも左に描かれているのは歴史のある鎮、木瀆に位置する遂初園である。木瀆は蘇州の西南30里にあり、南宋以来その名を知られた古い鎮である。康熙28年、第二次南巡は舟で木瀆に到着し、上陸して鄧尉、靈巖山などの景勝をめぐった。乾隆帝は何度も木瀆を訪れた。おそらくこのためであろう、徐揚の絵巻物は靈巖山からはじまり、木瀆鎮で東に向かう。古い鎮は工商業が繁栄しているのみならず、風景も優美であり、法雲古松、白塔帰帆、南山晴雪、斜橋分水、虹橋晚照、下沙落雁、山塘榆蔭、靈巖晚鐘、姜潭漁火、下津望月の十景をそなえる。この十景は『姑蘇繁華図』にも多く現れる。

遂初園は木瀆東街にあり、呉銓が築いたものである。書号を容斎といい、康熙末年に吉安知府をつとめ、退休ののちにこの庭を築いた。庭園には樓閣、亭榭、臺館、軒舫が配置され、垣根には奇石をめぐらし、古木を植え、屋中にも嘉花名卉を植え、「雲林に杏として靄かかり、花葉が参差す」。長廊にそって西にまがって西南方向にむかえば「払塵書屋」、静謐でひろびろとし、木陰が帳のごとく、坐して休憩するのによい。木立をぬけて北にむかえば「掬月亭」、清流にのぞんで、倒さに天空を涵み、影は几席に揺れ、宜于賞月を賞でるのに宜い。亭から東にむかい、堤にそって南に折れると「聽雨篷」である。夜に褥のなかで雨音を聴くのに宜い。その東は「夢軒」、「凝遠樓」であり、眺望するのに宜い。楼に登って見渡せば、館娃〔宮〕が西に対峙し、五塙が東をめぐり、天平が北の障えとなり、皋峰が南に控える。楼の東が「清曠亭」、綺疏洞開、遠風を招き入れ、風に臨んで懷いを暢すのに宜い。亭から南にむかい階段をのぼって梅林を抜けて、聳然として高いのが「横秀閣」。閣にのぼって眼を東北方に向ければ、万頃の田畑に阡陌が縦横にはしる。べつに「補閑堂」があり、平屋で奥深く、交窓と復壁、寒暑ともに宜い。遂初園は、当時にあって木瀆鎮の庭園でその右に出るもののがなかったのみならず、蘇州全体をつうじても「園林の勝を極めた」ものであった。呉銓は庭園が落成すると、康熙54年の状元であり、同じ時に退休した同郷の徐陶璋に頼んで庭園のために序を書いてもらった。呉銓は徽州の

璜源に生まれ、父に随って上海県に寄居し、さらに上海から蘇州に移っていた。故郷に因んでその読書室を「璜川書屋」と命名した。書屋には万巻の書を蓄え、すべて珍本秘籍であった。例えば北宋本『礼記单疏』は稀覯の本であった。蘇州の知名の士、惠棟らはみなここに足を運んで切磋し、呉家は「璜川呉氏」として大いに著名となった。呉銓は庭園のなかで、「日々に經籍を手に取り、幼い子どもたちを教え、暇があれば高所の登って遠望し、山色波光の秀を愛で」、林下に悠々自適の生活を送っていた¹⁶⁷⁾。

呉銓が亡くなると、書籍は散逸した。銓の長子である用儀、号は拙庵、がふたたび数万巻の書物を購入し、宋元の善本も多く集めた。次子の成佐、号は嬾庵、も新たに書籍を広く求め、三間の書楼を築き、「樂意軒」と名づけ、ならんだけ書架を本で満たした。成佐は『樂意軒書目』八巻、『嬾庵偶存稿』八巻と『讀史小論』二巻の著作を刊行した。用儀の子、泰来、字は企晋、号は竹嶼、は才能豊かで祖父と父の餘徳によつて、つねに江蘇、浙江の名士、王昶や王鳴盛らと交際してこの庭園のなかで作詩の会をひらき、一時の盛況をみた。十数年後、呉泰来は乾隆25年に二甲第三七名の順位で進士に合格し、清代の木瀆鎮でうまれた初めての進士となつた。乾隆27年、高宗が南巡すると、泰来は鑾駕をむかえて試験に応じ、内閣中書の官を賜った。後には北京で經学大師の惠棟と並び称せられ、人びとから「呉中七子」の一人と目された¹⁶⁸⁾。徐揚が描いた時は、まさに呉家がもっとも輝かしい時代であり、遂初園も羽振りのよい時代であった。惜しいことによい時は長くは続かず、まもなく兄弟間に財産争いがおこり、呉氏は図書を売り立てたのみならず、遂初園までも他人に売ってしまった。葉昌熾の詩に「門外の香渓客帆を送り、氣氛たる花葉 灵巖に満つ。池塘は猶お繞らす 孤山の夢、兄弟何ぞ嘗つて不咸（失道也）を痛まん」とある。葉の詩は遂初園の勝景を描写するとともに、呉氏兄弟が牆に鬪いだ悲劇にたいし深い遺憾の意を表明したものである。これより一代の名園は幾たびかその主を易え、葛氏、徐氏などの所有となつたが、園はしだいに荒廃した。道光年間の貢生であり長洲県の人、王汝玉は詩のなかでこう嘆いた。「詩酒

の風流、一瞬を餘し、尽多の群彦、簪裾に集う。荒園、今日何人が訪れん、只だ我れ猶お来りて遂初を説く」¹⁶⁹⁾。光緒年間、浙江省の寧海県から官を辞して帰郷した横金西塘の人、柳商賢が購入した。ほどなくして、柳氏が亡くなると、庭園はそのまま荒廃した。光緒末年、葉昌熾が甘肅から帰郷し、庭園のなかに家を借りて数年間住み、遺文を探訪した¹⁷⁰⁾。民国10年『木瀆小志』には、遂初園はすでに古跡に列せられており、その頃にはこの庭園が完全に廃棄されていたことがわかる。喜ぶべき事は、徐揚が木瀆鎮の市井の風景を描くと同時に、全盛期の遂初園を描いてくれていることである。後の人は、絵巻のなかに遂初園の人を魅了する風致を眼にすることができる。

胥門を過ぎて、吳趨坊の西城下には、絵巻中に描かれた布政司署のとなりに怡老園の一角がある。明代の蘇州の人王鏊は、正徳初年に内閣大学士となって機務にあづかったが、引退して帰郷すると、山荘に住むのを好んだ。その子で尚宝卿の職にあった延喆は、山中の景色を模倣して庭園を築き、「怡老」と名づけた。この庭園は水流に臨んで建物を置くとともに、夏駕湖の側にあり、城壁のひめがきがその前を囲んでおり、喧騒の中に静けさを得ることができた。庭園には「清蔭看竹」、「玄修芳草」、「擷芳笑春」、「撫松采霞」、「聞風水雲」などの風景がしつらえてあり、夏駕湖を取り込んでハス池としていた。王鏊は庭園中で、親友の沈周、吳寬、楊循吉や弟子の文徵明、祝允明らと詩文と酒の会を開いて、詩の応酬をし、ころゆくまで楽しんだ。王鏊の自題の詩には「吳王の消夏は残闇あり、特に幽亭を起こして要津を謝る。……綠楊、影を動かし、魚は日に吹く、紅蕊、香を留めは春を護る」とあった。文徵明がこれに和韻して「名園は詛曲して、城闕を帶び、積水は居然として遠津に見る。……江南の白苧は新暑を迎える、雨後の孤花、晚春の殿となる」とあった¹⁷¹⁾。師と弟子が唱和し、澹泊の志を標榜すると同時に、この勝景佳構にたいしては幾分か誇るところがあった。康熙元年、王鏊の邸宅と庭園は蘇州布政司の衙門に改築されたが、なお庭園の幽趣をのこしていた。

絵巻が山塘のつきあたりで虎丘に近づくと、

山水自然の風光がひろがる。これを城中の名園佳構に比べると、山塘の庭園には仮山や回廊、白壁や花の姿はないけれども、山は秀で水は靈、天然の趣があり、特別に広がりのある靜謐と人工に借りない自然のおもしろさがある。袁学瀾は贊を作っている。「山塘七里の水路は、胥江に流れ込み、多くの水辺の樓閣は門から画舫に通じる。幟をたてた亭が酒を売り、歌を求めればことごとく美姫。詩社のなかまと思うままに詩を作り、勝利をおさめるのはつねに多才の士」¹⁷²⁾。これは、文人学士が休閑をすごす最上の場所であった。山塘街の両側には、著名人の邸宅や庭園が隨所にあった。たとえば、西渓には陸龜蒙の寓舎があり、便山橋の南には顧苓が塔影園の故地に改築した雲陽草堂があり、その中には倚竹山房、松風寢、照懷亭などの風景がつくられていた。通貴橋の東には明代の大学士吳一鵬の玉涵堂、真趣園があり、半塘には王稚登の寓舎、陸廣明およびその弟仲和の宅、稀代の名媛董小宛の宅があった。山塘には詩人婁堅の寓舎、明末の遺老姜垓兄弟の寓舎があった。彩雲里には万暦時代の太僕少卿徐時泰の東園、西園があり、その中には東雅堂があり、校刊宋本『韓昌黎集』を藏し、堂のそばの高い土盛りが「瑞雲峰」、太湖石を高さ3丈ほどに積み上げて、その中には高さ3丈、幅20丈の石屏があり、「玲瓏刻削として一幅の画図の如し」であった¹⁷³⁾。山塘の花市には四季折々の花があり、袁学瀾がいう「垂楊は多く画樓を傍にして生え、煙月の春江は鏡の様に平らか。紅香を圧く担ぎ争いて市をなし、山塘の一路、花を売るの声」¹⁷⁴⁾。風景は絵画のようであり、花の香りが鼻をくすぐる。賑やかな花売りの声が響くと、ひとは知らず知らず痴けるが如く、酔うが如し。明代以来七里の山塘がつねに人びとの後ろ髪を引き、時に想い出させる魅力はここにあった。

虎丘には蘇州の山林勝景の精華が集まっていた。いわゆる「虎丘は諸山のなかでもっとも小さいが、名勝としてとりわけ有名である」。虎丘は別名海涌山といい、また虎阜とも称した。伝説によると、吳王闔閭がこの山下に葬られると、三日後に白虎がその上に蹲ったので、虎丘と名づけられたという。唐代には李虎の諱を避けて武丘と改名された。虎丘は小さな丘に過ぎない

が、丘と壑は雄大であり、林中の泉は水清らかで、さまざまな勝景があり、呉中第一の勝景と称えられた。唐宋以降、虎丘は天下に名の聞こえた遊覧の名所となった。山頂には五代の時代に造られた雲岩寺塔がある。別に劍池、陸羽井、鉄華岩、白蓮池、憨憨泉、生公講臺、千人坐、点頭石、真娘墓などの古跡もある。虎丘は数少ない人文の名勝であった。唐代の大書道家、顏真卿の筆になる「虎丘劍池」の四字は今でもそこにある。虎丘の上には元代の大画家、趙孟頫の寓舍、明人沈伯大の沈氏竹亭、徐有貞の学び屋、沈周の寓舍、王庭の王氏別業、礼部員外郎袁襄の袁氏別業、文徵明の兄、文伯仁の宅、眼鏡を製造した孫雲球の宅第、清廉高明で知られた蘇州知府陳鵬年の寓舍などがあった。劍池の傍らには明代の大学士申時行の寓舍、山門の左には清初の著名な文人汪琬が学んだ丘南草堂、雲隱庵には明末の文学家張鳳翼の学び屋があつた¹⁷⁵⁾。明代の崇禎六年、復社は千人坐においておおいに盛り上がった虎丘大会を挙行し、後の人びとに感動をのこした。康熙帝、乾隆帝という祖父と孫はそれぞれ六回南巡をおこなったが、毎回虎丘を遊覧し、賦詩を残した。歴代の文人雅士による吟誦の作がどれほどあるか、とても数え切れない。絵巻の上でこれを見ると、虎丘寺の殿宇建築はすべて描かれている。下から上にむかって正山門、二山門、五十三參、三山門、大雄宝殿、千仏閣、伽藍殿、最高処つまり雲岩寺塔があり、山の中腹には石のアーチが崖の両側を渡っており、「双吊桶」と俗称されていた。その下が有名な劍池である。劍池は虎丘の風景のなかでもっとも優れており、「虎丘劍池」はすでに蘇州の古びた美しさの象徴となっていた¹⁷⁶⁾。『姑蘇繁華図』ののち、乾隆末年には陸肇域、任兆麟の『虎阜志』があらわされ、巻頭には『虎丘山塘図』、『前山図』、『後山図』、『虎阜十景図』などが描かれている。文物古跡の羅列は詳しいけれども、彩色の絵巻物がもつ絢麗多姿はそこにはない。

以上述べてきたところをまとめると、徐揚が巻物を描いた時代は、まさしく蘇州の経済と文化の繁栄が最高潮に達した時期であり、一本の

『姑蘇繁華図』は、当時の蘇州の騒がしい市場を示すばかりか、蘇州文化を代表する科挙教育、

演劇音楽、婚礼習俗、庭園藝術などの豊富な内容をあますところなく示している。絵巻中の多くの情景は、文献によって再現することが難しかったり、あるいは文献に欠けたりしているところを補うことができ、蘇州の文化を記録したきわめて得難い貴重な遺産となっている。これを、その前後の時代に描かれた絵巻物と比較しても、『姑蘇繁華図』は他をもって代え難い価値をもつのである。蘇州の繁栄の風景を反映したものとして、この絵巻以前には王熙の康熙『南巡図』があり、この後には、おなじく徐揚が描いた乾隆『南巡図』と乾隆末年にイギリスの使節マートンの隨行員が描いた絵がある。これらの絵図は蘇州だけを描いたのではないから、蘇州についての部分も『姑蘇繁華図』と比較するのは自ずと無理がある。明清都市の繁栄を描いたものとして、『姑蘇繁華図』より前には、明代嘉靖年間ころの作品で南京の風景を反映した『南都繁会図』、万曆年間ころの作品で、北京の繁栄を反映した『皇都積勝図』、万曆天啓年間あたりの作品で、南京城南部の市井の風貌を反映した『上元灯彩図』がある。これらの絵図は多くの店舗の宣伝文句と文化の場面を描いているけれども、数量の多さと内容の豊富さにおいて、『姑蘇繁華図』は以前の各種の絵巻よりもはるかに勝っていると断言できる。これらの絵巻はいずれも確かな製作年代が知られていない。また、あるものはいったいどの場所を描いたのか特定できないものもある。このため、製作年代の確かさ、描いた場所の明確さを論じるならば、『姑蘇繁華図』をおいてほかにはない。『姑蘇繁華図』のいくつかの場面の書き方は精緻とは言い難いかもしれない。これを『南都繁会図』と康熙『南巡図』に比べると、その藝術水準はやや遜色があるかもしれない。しかし、その時代の蘇州都市文化について豊かな情報を提供してくれる点において、その前後1、2世紀の間の同類の絵巻物のはるか上をゆくのである。『姑蘇繁華図』は、18世紀前期から中期にかけての中国経済文化の中心であった蘇州の都市景觀を全面的に開示する貴重な人類の文化遺産であるといって間違いない。

注

1. 沈寓「治蘇」、『清經世文編』卷23、中華書局1992年影印本。
2. 劉獻廷『廣陽雜記』卷4に言う。「天下有四聚、北則京師、南則仏山、東則蘇州、西則漢口」。中華書局標点本、1985年第2次印刷。
3. 劉大觀は、「杭州以湖山勝、蘇州以市肆勝、揚州以園亭勝」と見ていた。李斗『揚州画舫錄』卷6「城北錄」所引、江蘇広陵古籍刻印社1984年校点本。
4. 康熙『蘇州府志』卷54「遺事下」。
5. 乾隆『吳縣志』卷23「物産」。
6. 蘇州歴史博物館等編『明清蘇州工商業碑刻集』、江蘇人民出版社、1981年、第331頁。
7. 『韻鶴軒雜著 戲館賦』。
8. 『韻鶴軒雜著』序。
9. 王相『鄉程日記』。
10. 道光『蘇州府志』卷首之二「巡幸下」。
11. 徐揚『盛世滋生図』跋。作品は遼寧省博物館所蔵。ここで用いたのは遼寧省博物館、中国歴史博物館、蘇州市地方志編纂委員会編、文物出版社1986年出版の影印本である。同年、商務印書館臺灣分館と香港分館は「清 徐揚『姑蘇繁華図』」という書名でそれぞれ再版したが、これらも参考にした。
12. 楊伯達『清代院画』、紫禁城出版社、1993年、第52、67、74頁を参照のこと。
13. 故宮博物院編『欽定石渠寶笈』続編、三編。王宏鈞「清代の歴史和〈盛世滋生図〉卷——為紀念蘇州建城二千五百周年而作」、『盛世滋生図』代序を参照のこと。
14. 徐揚みずからが提出した履歴によると、乾隆40年の時点で64歳とあるので、徐揚が生まれたのは康熙61年（1712年）ということになる。また、官員履歴によると、乾隆42年、徐揚は刑部山西司主事として京察の対象となった。つまり、徐揚は少なくとも66歳まで生きていたことになる。徐揚が絵図を奉獻したさいの年齢も档案によって推定した。秦国經主編『清代官員履歴档案全編』、中国第一歴史档案館蔵、華東師範大学出版社、1997年。
15. 徐揚『盛世滋生図』自跋。
16. 『盛世滋生図』中の店舗の看板について、もつ

- とも早く統計したのは李華先生であり、230あまりの店舗に看板があるとした。王宏鈞先生などもこの説によっている。筆者は李先生の研究成果を利用し、あらためて数えた結果、260あまりの店舗に看板があるという結論に達した。李華「從徐揚《盛世滋生図》看清代前期蘇州工商業的繁榮」、『文物』1960年第1期。
17. 鄭若曾「楓橋陰要說」、康熙『吳縣志』卷26「兵防」。
 18. 嘉靖『吳邑志』卷12「水 城外河渠」。
 19. 嘉靖『吳邑志』卷10「風俗」。
 20. 嘉靖『吳邑志』吳邑城郭図説。
 21. 『袁中郎先生批評唐伯虎匯集』卷2「閨門即事」。
 22. 崇禎『吳縣志』王心一序。
 23. 康熙『蘇州府志』卷21「風俗」。
 24. 孫嘉淦「南遊記」、『清經世文編』卷6。
 25. 納蘭常安『宦遊筆記』卷18「江南三」、臺灣広文書局影印本。
 26. 康熙時代の人宋起鳳の『稗説』卷3「山繭」の条には「其繭不借人力飼養、每春時、各民家入山就本業山場、布蚕子于樹、或在椿、或在椒、或在道旁篋蘿野叢間。俟結繭後、各采帰。繕為絲線、婦女成織、售于市……今沂蒙新泰諸村落老人能言之」とある。『明史研究資料叢刊』第2輯、江蘇人民出版社、1982年。
 27. 『江南省蘇州府街道開店總目』は宮崎成身編集『視聽草』続三集第七に収録されている。筆者は松浦章「乾隆南巡と唐船風説書」が引用するものによった。松浦の論文は『明清時代の法と社会』、汲古書院、1993年。
 28. 『明清蘇州工商業碑刻集』第45頁。
 29. 江蘇省博物館編『江蘇省明清以來碑刻資料選集』、生活・読書・新知三聯書店、1959年、第24頁、26-27頁。
 30. 康熙『蘇州府志』卷21「風俗」。
 31. 拙著『江南絲綢史研究』、農業出版社、1993年を参照されたい。
 32. 乾隆『南匯縣新志』卷15「土產」。
 33. 嘉慶『珠里小志』卷4「物産」。
 34. 褚華『木棉譜』。
 35. 嘉慶『南翔鎮志』卷1「物産」。
 36. 乾隆『繞外岡志』卷4「物産」。
 37. 故宮博物院明清档案部編：『李煦奏摺』、中華

清代蘇州都市文化繁榮の実写（范）

- 書局, 1976年, 第179-180頁。
38. 湯斌『湯子遺書』卷2「采買布匹疏」, 「解送布匹疏」, 四庫全書本。
39. 乾隆『婁塘志』卷8「雜類志」。
40. 道光『鶴市志略』卷下「物產」, 乾隆『鎮洋縣志』卷1「風俗」。
41. 乾隆『長洲縣志』卷10「風俗」。
42. 「康熙五十九年休寧陳士策圖書」。章有義『明清及近代農業史論集』第310-316頁（中国農業出版社, 1997年）より転引。
43. 嘉慶『珠里小志』卷4「物產」。
44. 許仲元『三異筆談』卷3「布利」。
45. 江蘇省博物館編『江蘇省明清以來碑刻資料選集』第59頁。
46. 雍正七年十二月初二日浙江總督李衛摺, 『雍正硃批諭旨』第42冊。
47. 乾隆『元和縣志』卷10「風俗」。
48. 江蘇省博物館編『江蘇省明清以來碑刻資料選集』第61頁。
49. 乾隆『長洲縣志』卷36「物產」。
50. 江蘇省博物館編『江蘇省明清以來碑刻資料選集』第273頁。
51. 蘇州歷史博物館等編『明清蘇州工商業碑刻集』第267頁, 270頁。
52. 蘇州歷史博物館等編『明清蘇州工商業碑刻集』第267頁, 271頁。
53. 正德『姑蘇志』卷14「土產」。
54. 乾隆五年閏六月十一日, 蘇州巡撫張渠「為請嚴米燒之禁以裕民食事摺」, 『歷史檔案』1987年第1期所載の史料。
55. 江蘇省博物館編『江蘇省明清以來碑刻資料選集』第196頁。
56. 正德『姑蘇志』卷14「土產」。
57. 顧祿『桐橋倚棹錄』卷11「工作」。
58. 道光『滸墅閩志』卷11「物產」。
59. 江蘇省博物館編『江蘇省明清以來碑刻資料選集』第237-240頁。
60. 正德『姑蘇志』卷14「土產」。
61. 蘇州歷史博物館等編『明清蘇州工商業碑刻集』第142-146頁。
62. 拙著『明清江南商業的發展』（南京大学出版社, 1998年）第223頁を参照されたい。
63. 蘇州歷史博物館等編『明清蘇州工商業碑刻集』第154-156頁。
64. 蘇州歷史博物館等編『明清蘇州工商業碑刻集』第163-174頁。
65. 『史料旬刊』第19期, 『清高宗實錄』卷1493。
66. 宗信『統蘇州竹枝詞』は, 「專諸巷內骨董多」という。蘇州市文化局編『姑蘇竹枝詞』第55頁, 百家出版社, 2002年。
67. 徐珂『清稗類鈔』風俗類「吳俗前後有三好」の条。
68. 張瀚『松窓夢語』卷4「商賈紀」。
69. 蘇州歷史博物館等編『明清蘇州工商業碑刻集』第225頁。
70. 蘇州歷史博物館等編『明清蘇州工商業碑刻集』第226, 213, 207頁。
71. 黃廷堅『第六絃溪文鈔』卷2「藏書二友記」。
72. 故宮博物院明清檔案部編『李煦奏摺』, 中華書局, 1976年, 第83-84, 195, 207頁。
73. 錢泳『履園叢話』叢話十二「藝能 刻書」, 中華書局1979年校点本。
74. 崇禎『吳縣志』卷53「人物」。また康熙『蘇州府志』卷21「風俗」は「丹青翰墨, 先哲多擅名, 至今風雅不絕。賞鑑收藏, 寸縑尺幅, 貴逾拱璧, 巧者工臨摹以亂真, 四方慕名者懸金以購」と記す。
75. 錢泳『履園叢話』叢話十二「裝潢」。
76. 顧祿『桐橋倚棹錄』卷10「市廬」, 上海古籍出版社1980年標点本。
77. 蘇州歷史博物館等編『明清蘇州工商業碑刻集』第89-92頁。
78. 江蘇省博物館編『江蘇省明清以來碑刻資料選集』第358頁。
79. 江蘇省博物館編『江蘇省明清以來碑刻資料選集』第361-362頁。
80. 正德『姑蘇志』卷14「土產」。
81. 顧祿『桐橋倚棹錄』卷10「市廬」。
82. 顧祿『桐橋倚棹錄』卷10「工作」。
83. 正德『姑蘇志』卷14「土產」。
84. 拙著『明清江南商業的發展』（南京大学出版社, 1998年）第66頁を参照されたい。
85. 雍正四年七月十八日 浙總督高其倬奏, 『雍正硃批諭旨』。
86. 王維德『林屋民風』卷7「民風四」, 康熙刻本。
87. 鄭光祖『一斑錄』附編一「權量」, 中国書店1990年影印本。

88. 足立啓二「大豆餅流通と清代の商業的農業」,
『東洋史研究』第37卷第3号。
89. 『太倉州取締海埠以安海商碑』。碑は太倉劉家
港天妃宮紀念館所蔵。
90. 蘇州歴史博物館等編『明清蘇州工商業碑刻集』
第238頁。
91. 顧震涛『吳門表隱』卷20, 江蘇古籍出版社1986
年標点本。
92. 江蘇省博物館編『江蘇省明清以来碑刻資料選
集』第372-374頁。
93. 顧祿『桐橋倚棹錄』卷10「市塵」。
94. 徐珂『清稗類鈔 飲食類』「蘇州人之飲食」
条, 中華書局1986年標点本。
95. 顧祿『桐橋倚棹錄』卷10「市塵」。
96. 乾隆『蘇州府志』卷12「物産」, 乾隆『元和
県志』卷16「物産」, 顧震涛『吳門表隱』附集。
97. 江蘇省博物館編『江蘇省明清以来碑刻資料選
集』第196-197頁。
98. 江蘇省博物館編『江蘇省明清以来碑刻資料選
集』第222-224頁。
99. 顧祿『桐橋倚棹錄』卷10「市塵」。
100. 京都大学文学部図書館所蔵『乾隆帝南巡始
末聞書』の記載から, 乾隆の第三回南巡は仰蘇
樓を訪れたことが知られる。
101. 葉君曜編『騙術奇談』卷1「參行受騙」, 宣
統元年掃葉山房石印本。
102. 江蘇省博物館編『江蘇省明清以来碑刻資料
選集』第248頁。
103. 江蘇省博物館編『江蘇省明清以来碑刻資料
選集』第358頁。
104. 江蘇省博物館編『江蘇省明清以来碑刻資料
選集』第383頁。
105. 民国八年『蘇州總商合同会録』。南京大学歴
史系蔵。
106. 江蘇省博物館編『江蘇省明清以来碑刻資料
選集』第366頁。
107. 蘇州歴史博物館等編『明清蘇州工商業碑刻
集』第289頁。
108. 江蘇省博物館編『江蘇省明清以来碑刻資料
選集』第407-408頁。
109. 錢泳『履園叢話』叢話二十四「雜記下」「孫
春陽」の条。
110. 蘇州歴史博物館等編『明清蘇州工商業碑刻
集』第208, 227頁。
111. 顧祿『桐橋倚棹錄』卷10「市塵」。
112. 江蘇省博物館編『江蘇省明清以来碑刻資料
選集』第356頁。
113. 許華『木棉譜』。
114. 道光『乍浦備志』卷6「閔梁」。
115. 崇禎『吳県志』卷29「物産」。
116. 江蘇省博物館編『江蘇省明清以来碑刻資料
選集』第195頁。
117. 江蘇省博物館編『江蘇省明清以来碑刻資料
選集』第213頁。
118. 江蘇省博物館編『江蘇省明清以来碑刻資料
選集』第174-177頁。
119. 江蘇省博物館編『江蘇省明清以来碑刻資料
選集』第359頁。
120. 江蘇省博物館編『江蘇省明清以来碑刻資料
選集』第204, 206頁。
121. 江蘇省博物館編『江蘇省明清以来碑刻資料
選集』第356-357頁。
122. 『李煦奏摺』第114頁。
123. 顧祿『桐橋倚棹錄』卷10「市塵」。
124. 吳中孚『商賈便覽』卷1「江湖必読原書」,
乾隆刻本。
125. 吳中孚『商賈便覽』卷6「應酬書信」答「託
家買貨」条。
126. 詹元相『畏齋日記』, 『清史資料』第4輯, 第
187, 236頁, 中華書局1983年標点本。
127. 蘇州市文化局編『姑蘇竹枝詞』第37頁, 百
家出版社, 2002年。
128. 江蘇省博物館編『江蘇省明清以来碑刻資料
選集』第60頁。
129. 顧祿『桐橋倚棹錄』卷10「市塵」。
130. 蘇州市文化局編『姑蘇竹枝詞』第39頁。
131. 郎瑛『七修類稿』卷16「義理類」「混堂」条,
文化藝術出版社1998年点校本。また, 嘉靖18
年, 日本の使者策彦周良らが山東南城水馬駅で
入った浴堂は「香水混堂」であった。『策彦和尚
初渡集』下之上, 牧田諦亮編『策彦入明記の研
究』京都法藏館, 1959年。
132. 康熙『蘇州府志』卷21「風俗」。また, 正徳
『姑蘇志』卷13「風俗」に類似の描写が見えて
いる。
133. 顧祿『桐橋倚棹錄』卷12「園圃」。
134. 顧祿『吳趨風土錄』, 『小方壺斎輿地叢鈔』
第六帙。

清代蘇州都市文化繁榮の実写（范）

135. 江蘇省博物館編『江蘇省明清以来碑刻資料選集』第418頁。
136. 康熙『蘇州府志』卷21「風俗」。
137. 江蘇省博物館編『江蘇省明清以来碑刻資料選集』第98-100頁。
138. 康熙『蘇州府志』卷21「風俗」。また正徳『姑蘇志』卷13「風俗」にも類似の描写がある。
139. 陳夔龍『夢蕉亭雜記』卷2, 山西古籍出版社1996年標点本。
140. 鈕琇『觚頃』続編卷4「蘇州土産」, 上海古籍出版社1986年点校本。
141. 楊朝麟『紫陽書院碑記』。
142. 拙稿「明清江南進士数量、地域分布及其特色分析」, 『南京大學學報』1997年第2期を参照されたい。
143. 顧祿『桐橋倚棹錄』6「義局」。
144. この試験の場面について、張英霖、姚世英の『盛世滋生図』図版説明は、按察司衙門でおこなわれる省の学政が主催する院試であるとした。実際には、試験会場は蘇州知府衙門であり、徐揚が「三条燭焰、或掲才于童子之場」ということからも、これが童生試であることがわかる。当時、府試が行なわれるのは四月であった。これらから、この試験は府試であって、院試ではないと断定できる。
145. 蘇州市文化局編『姑蘇竹枝詞』第37頁、46頁。
146. 蘇州市文化局編『姑蘇竹枝詞』第53頁。
147. 范成大『吳郡志』卷2「風俗」。
148. 康熙『蘇州府志』卷21「風俗」。
149. 徐樹丕『識小錄』『涵芬樓秘籍』第一集。
150. 乾隆『長洲県志』卷10「風俗」。
151. 江蘇省博物館編『江蘇省明清以来碑刻資料選集』第284-294頁。
152. 徐珂『清稗類鈔 戯劇類』「郭某始創戲園于蘇州」の条。
153. 顧祿『清嘉錄』卷7「青竜戯」, 江蘇古籍出版社1986年標点本。
154. 顧公燮『消夏閑記摘抄』卷上, 『涵芬樓秘籍』第二集。
155. 慰勤殿旧蔵「聖祖諭旨」, 朱家溍『故宮退食錄』(北京出版社, 1999年), 第544-545頁から転引。
156. 中国第一歴史档案館編『康熙朝漢文硃批奏摺匯編』第1冊, 第9頁。
157. ここでは、張英霖、姚世英『盛世滋生図』図版説明を参考にした。また、吳新雷主編『中国崑劇大辞典』(南京大学出版社, 2002年) も『白兔記』の場面であるとしている。
158. ここでは、張英霖、姚世英『盛世滋生図』図版説明を参考にした。
159. 顧祿『清嘉錄』卷2「春臺戯」。
160. 蘇州市文化局編『姑蘇竹枝詞』第48頁。
161. ここでは、張英霖、姚世英『盛世滋生図』図版説明を参考にした。
162. 顧公燮『消夏閑記摘抄』卷上。
163. 乾隆『吳郡志』卷24「風俗」。
164. 絵図のなかには、蘇州の人の集まる場所でかならず聞かれた彈詞開篇の藝能は描かれていない。
165. 康熙『蘇州府志』卷21「風俗」。
166. 蘇州市文化局編『姑蘇竹枝詞』第38-39頁。
167. 徐陶璋『遂初園序』, 道光『蘇州府志』卷46「第宅園林一」, 民国『木瀆小志』卷1「古跡」, 卷3「人物」。
168. 葉昌熾『藏書紀事詩』卷4「吳銓容斎」の条が引用する記事。吳泰來の科挙の順位は朱保炯, 謝沛霖編『明清進士題名碑錄索引』によつて得られる。
169. 王汝玉『香溪雜詠』, 『木瀆小志』卷6「題詠」。
170. 民国『木瀆小志』卷3「人物」。
171. 道光『蘇州府志』卷46「第宅園林一」。
172. 蘇州市文化局編『姑蘇竹枝詞』第354頁。
173. 顧祿『桐橋倚棹錄』卷8「第宅園林」。
174. 蘇州市文化局編『姑蘇竹枝詞』第358頁。
175. 顧祿『桐橋倚棹錄』卷8「第宅園林」。
176. ここでは、張英霖、姚世英『盛世滋生図』図版説明を参考にした。

Portraiture of the Flourishing City Culture of Su Zhou: “The Portrayal of the Prosperity of Gu Su”

Jinmin FAN

(translated by Shigeki IWAI)

“The Portrayal of the Prosperity of Gu Su” by Xu Yang comprises portraits of numerous endemic stores, of which as many as 260 can be made out. The booming features of Su Zhou city, the most renowned industrial and business metropolis of China in the prime of the Qing Dynasty, therefore, are illustrated roundly and can be perceived by intuition. In addition, the historical bases reflected in those stores all have documentary records. “The Portrayal of the Prosperity of Gu Su” not only shows Su Zhou’s boisterous municipal market of that time, but also reveals Su Zhou’s regional culture in an all-round way, including its imperial examinations and education; traditional opera and music; nuptials and other customs; horticulture, etc. Quite a few scenes in this drawing cannot find their equivalences in documents and some serve as compensation for documentary deficiencies, which qualifies it as an important heritage fully reflecting the city features of Su Zhou as an economic and cultural center of China in the early period and metaphase of the 18th century.

Keywords : “The Portrayal of the Prosperity of Gu Su”, Su Zhou,
city culture, endemic store, cultural heritage